



Informatica®  
10.5.8

# バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード (10.5.8)

Informatica バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード (10.5.8)

10.5.8

2025 年 3 月

© 著作権 Informatica LLC 2006, 2025

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

オプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、[infa\\_documentation@informatica.com](mailto:infa_documentation@informatica.com) までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2025-05-18

# 目次

<b>序文</b> .....	8
Informatica のリソース.....	8
Informatica Network.....	8
Informatica ナレッジベース.....	8
Informatica マニュアル.....	9
Informatica 製品可用性マトリックス.....	9
Informatica Velocity.....	9
Informatica Marketplace.....	9
Informatica グローバルカスタマサポート.....	9
 <b>第 1 章 : アップグレードの概要</b> .....	10
Informatica のアップグレード.....	10
アップグレードパス.....	10
アップグレードプロセス.....	11
 <b>第 2 章 : HotFix の適用</b> .....	13
HotFix のインストールおよびロールバックの概要.....	13
サービス HotFix の適用.....	14
HotFix を適用する前に.....	14
グラフィカルモードでのサービス HotFix の適用.....	16
コンソールモードでのサービス HotFix の適用.....	17
サイレントモードでのサービス HotFix の適用.....	18
HotFix を適用した後に.....	21
サービス HotFix のロールバック.....	22
グラフィカルモードでのサービス HotFix のロールバック.....	22
コンソールモードでのサービス HotFix のロールバック.....	23
サイレントモードでのサービス HotFix のロールバック.....	24
クライアント HotFix の適用.....	25
グラフィカルモードでのクライアント HotFix の適用.....	25
サイレントモードでのクライアント HotFix の適用.....	26
バックアップの場所からのディストリビューションパッケージの削除.....	27
クライアント HotFix のロールバック.....	28
グラフィカルモードでのクライアント HotFix のロールバック.....	28
サイレントモードでのクライアント HotFix のロールバック.....	28
 <b>第 3 章 : Linux でドメインをアップグレードする前に</b> .....	30
リリースノートの確認.....	30
システム要件の確認.....	30
一時ディスクスペースと権限の確認.....	30
ドメインアップグレード要件の確認.....	31

パッチ要件の確認 Linux の場合. . . . .	32
ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX. . . . .	34
環境変数の確認. . . . .	34
インストーラファイルのダウンロードと抽出. . . . .	35
Linux でインストーラパッケージのチェックサムを確認. . . . .	36
Informatica Upgrade Advisor を実行します. . . . .	36
構成ファイルのバックアップ. . . . .	37
<b>第 4 章 : UNIX でドメインをアップグレードする前に. . . . .</b>	<b>38</b>
リリースノートの確認. . . . .	38
システム要件の確認. . . . .	38
UNIX でのパッチ要件の確認. . . . .	39
Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合) . . . . .	39
ドメインアップグレード要件の確認. . . . .	39
一時的なディスク容量の要件. . . . .	39
サイトキーの確認. . . . .	40
ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX. . . . .	40
環境変数の確認. . . . .	41
最大ヒープサイズの確認. . . . .	42
インストーラファイルのダウンロードと抽出. . . . .	43
UNIX でのインストーラパッケージのチェックサムの確認. . . . .	43
Informatica Upgrade Advisor を実行します. . . . .	43
構成ファイルのバックアップ. . . . .	45
<b>第 5 章 : Windows でドメインをアップグレードする前に. . . . .</b>	<b>46</b>
リリースノートの確認. . . . .	46
システム要件の確認. . . . .	46
ドメインアップグレード要件の確認. . . . .	47
一時ディスクスペースと権限の確認. . . . .	47
サイトキーの確認. . . . .	48
ディストリビューションパッケージ要件の確認 (Windows) . . . . .	48
環境変数の確認. . . . .	49
最大ヒープサイズの確認. . . . .	50
インストーラファイルのダウンロードと抽出. . . . .	50
Windows でのインストーラパッケージのチェックサムの確認. . . . .	51
Informatica Upgrade Advisor を実行します. . . . .	51
<b>第 6 章 : アップグレードの準備. . . . .</b>	<b>53</b>
データトランスフォーメーションファイルのバックアップ. . . . .	53
PowerCenter リポジトリの準備. . . . .	54
モデルリポジトリのバックアップ. . . . .	54
データ統合サービスの準備. . . . .	54
Profiling ウェアハウスの準備. . . . .	54

参照データのディレクトリの準備. . . . .	55
Metadata Manager の準備. . . . .	55
Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ. . . . .	55
Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ. . . . .	56
データベースのバックアップ. . . . .	56
ドメインの準備. . . . .	56
ドメインのシャットダウン. . . . .	56
ドメインのバックアップ. . . . .	56
<b>第 7 章: ドメインのアップグレード. . . . .</b>	<b>58</b>
Informatica ドメインのアップグレード. . . . .	58
グラフィカルモードでのアップグレード. . . . .	58
コンソールモードでのアップグレード. . . . .	69
サイレントモードでのアップグレード. . . . .	71
プロパティファイル内のパスワードの暗号化. . . . .	72
プロパティファイルの作成. . . . .	72
サイレントインストーラの実行. . . . .	74
ドメインアップグレードのトラブルシューティング. . . . .	74
<b>第 8 章: ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード. . . . .</b>	<b>76</b>
ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要. . . . .	76
別のデータベースへの移行. . . . .	77
別のマシンへのインストールの移行. . . . .	77
インストールディレクトリのコピー. . . . .	78
Windows 上のポートの使用可否の判定. . . . .	78
手順 3. システムユーザーアカウントの作成. . . . .	79
手順 4. サービスマシンへのネイティブ接続の設定. . . . .	79
手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール. . . . .	80
手順 6. データベースクライアントの環境変数の設定. . . . .	81
手順 6. UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定. . . . .	81
グラフィカルモードでのアップグレード. . . . .	83
コンソールモードでのアップグレード. . . . .	95
サイレントモードでのアップグレード. . . . .	102
ノード設定の変更の完了. . . . .	102
ブラウザのキャッシュをクリアする. . . . .	102
ロケール環境変数の設定. . . . .	102
ライブラリパス環境変数の設定. . . . .	103
動的ポート番号の範囲の確認. . . . .	104
ノードバックアップディレクトリの確認. . . . .	104
PowerExchange アダプタの設定. . . . .	104
<b>第 9 章: アプリケーションサービスをアップグレードする前に. . . . .</b>	<b>105</b>
Informatica の環境変数の設定. . . . .	105

ロケール環境変数の設定. . . . .	106
Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認. . . . .	106
ブラウザのキャッシュをクリアする. . . . .	107
<b>第 10 章 : アプリケーションサービスのアップグレード. . . . .</b>	<b>108</b>
アプリケーションサービスのアップグレードの概要. . . . .	108
サービスをアップグレードする特権. . . . .	108
以前のバージョンからのサービスアップグレード. . . . .	109
アップグレードウィザードの実行. . . . .	110
モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認. . . . .	110
オブジェクト依存関係のグラフ. . . . .	111
Model Repository サービスの詳細プロパティ. . . . .	111
<b>第 11 章 : Informatica クライアントのアップグレード. . . . .</b>	<b>112</b>
Informatica クライアントのアップグレードの概要. . . . .	112
Informatica クライアントをアップグレードする前に. . . . .	112
グラフィカルモードでのアップグレード. . . . .	114
サイレントモードでのアップグレード. . . . .	115
プロパティファイルの作成. . . . .	115
サイレントインストーラの実行. . . . .	116
アップグレードした後に. . . . .	116
<b>第 12 章 : アップグレードした後に. . . . .</b>	<b>117</b>
Informatica ドメイン. . . . .	117
ログイベントディレクトリの更新. . . . .	117
Informatica クライアントをアップグレードします。 . . . .	118
別のデータベースへの移行. . . . .	118
ドメインへのクライアントの接続の保護. . . . .	119
Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード. . . . .	121
PowerCenter リポジトリサービス. . . . .	121
PowerCenter 統合サービス. . . . .	121
Data Integration Service. . . . .	121
ログイベントディレクトリの更新. . . . .	122
構成ファイルの更新. . . . .	122
Java 11 以降での廃止されたガベージコレクションオプションの削除. . . . .	122
アナリストサービス. . . . .	123
フラットファイルキャッシュの場所の確認. . . . .	123
一時エクスポートファイルの場所の確認. . . . .	124
アナリストサービスのリサイクル. . . . .	124
Metadata Manager エージェント. . . . .	124
Metadata Manager サービス. . . . .	125
Metadata Manager プロパティファイルの更新. . . . .	125
UNIX での ODBCINST 環境変数の確認. . . . .	125

Cognos 依存関係の JAR ファイルの更新.....	125
リソースのパーズおよびリロード.....	126
Informatica Platform リソースのアップグレード.....	126
Data Transformation ファイルのコピー.....	127
新機能および変更点の確認.....	127
<b>付録 A: アップグレードチェックリスト.....</b>	<b>128</b>
アップグレードチェックリストの概要.....	128
ドメインをアップグレードする前に.....	128
ドメインのアップグレード.....	130
アプリケーションサービスをアップグレードする前に.....	130
アプリケーションサービスのアップグレード.....	130
Informatica クライアントのアップグレード.....	131
アップグレードした後に.....	131
<b>付録 B: ディストリビューションパッケージの管理.....</b>	<b>133</b>
ディストリビューションパッケージの管理の概要.....	133
作業を開始する前に.....	134
コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除.....	134
サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除.....	135
インストールした後に.....	136
<b>索引.....</b>	<b>137</b>

# 序文

製品をアップグレードするには、このアップグレードガイドの手順に従ってください。

Informatica ドメインのサービスとクライアントをアップグレードするには、アップグレードガイドを参照してください。データベース要件を確認して、データベースをドメイン用に設定します。サポートされている製品のディストリビューションは、ネイティブ環境でも非ネイティブ環境でも確認できます。使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

複数台のマシンに製品サービスとクライアントをアップグレードできます。すべてのノードでサーバインストローを実行してアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインして、アプリケーションサービスをアップグレードする必要があります。その後、すべてのマシンの Informatica クライアントをアップグレードできます。

## Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

### Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

### Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム ([KB\\_Feedback@informatica.com](mailto:KB_Feedback@informatica.com)) です。



## Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム ([infa\\_documentation@informatica.com](mailto:infa_documentation@informatica.com)) までご連絡ください。

## Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

## Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、[ips@informatica.com](mailto:ips@informatica.com) から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

## Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

## Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network を介してグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network のオンラインサポートリソースについては、<https://network.informatica.com> のサポートオプションをご確認ください。

# 第 1 章

## アップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica のアップグレード, 10 ページ](#)
- [アップグレードパス, 10 ページ](#)
- [アップグレードプロセス, 11 ページ](#)

## Informatica のアップグレード

Informatica Platform は、サーバーコンポーネントおよび 1 つ以上のクライアントコンポーネントで構成されます。Informatica では、Informatica サービスおよびクライアントをアップグレードするために別々のインストーラが提供されます。

ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

## アップグレードパス

実行するアップグレードパスは、現在使用している製品とバージョンによって異なります。

HotFix またはアップグレードを適用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮してください。

- メジャーリリースに関連付けられているバージョンを使用している場合は、HotFix を適用できます。例えば、10.5 はメジャーリリースなので、10.5.x のどのバージョンからでも HotFix を適用できます。
- 現在メジャーリリースに関連付けられたバージョンを使用していない場合は、サポートされている以前のリリースから現在のリリースにアップグレードできます。
- 直接アップグレードすることができないバージョンを使用している場合は、サポートされるバージョンにアップグレードしておく必要があります。
- サポートされている更新には、HotFix、サービスパック、累積パッチも含まれます。

**重要:** Informatica インストーラでサポートされている他の製品と同じドメインに Data Engineering がある場合は、10.5.8 にアップグレードする前に、すべての製品がサポートされている同じアップグレードバージョンにアップグレードされていることを確認してください。

以下の表に、ルールとガイドラインの詳細を示します。

製品	バージョン
PowerCenter	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.8 バージョンにアップグレードできます。
Informatica Data Quality	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.8 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Integration	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.8 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Quality	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.8 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Streaming	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.8 バージョンにアップグレードできます。
Data Privacy Management	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.8 HotFix を適用します。
Enterprise Data Catalog	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.8 HotFix を適用します。
Enterprise Data Preparation	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.8 HotFix を適用します。
Test Data Management	10.5.8 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.2 HotFix 2、10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.8 HotFix を適用します。

## アップグレードプロセス

Informatica サービスと Informatica クライアントのアップグレードは、複数のフェーズで構成されています。

アップグレードは以下のフェーズで構成されます。

1. ドメインに対するアップグレード前タスクを実行し、正常にインストーラを実行できるようにします。
2. ドメインをアップグレードします。ドメインをアップグレードするには、Informatica サーバーインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。ドメインアップグレードウィザードでサーバーファイルをインストールし、ドメインを設定します。ドメインに複数のノードがある場合、すべてのノードをアップグレードする必要があります。ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

以下の表に、ドメインをアップグレードするときにインストーラが実行する処理を示します。

タスク	内容
Informatica Upgrade Advisor を実行します。	インストーラがアップグレード前タスクを実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。 アップグレードを進める前に、競合を解決します。
Informatica のインストール。	Informatica のディレクトリとファイルを新しいディレクトリにインストールします。
infa_shared ディレクトリのコピー。	infa_shared ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーします。
暗号化キーファイルをコピーします。	ドメイン暗号化キーファイルを、既存のインストールディレクトリからアップグレード時に指定したディレクトリにコピーします。
既存のドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、Kerberos 構成ファイルおよびキータブファイルをコピーします。	既存インストールディレクトリの Kerberos 構成ファイルを、新しいインストールディレクトリにコピーします。既存インストールディレクトリのキータブファイルを、アップグレード時に指定した暗号化キーディレクトリにコピーします。
既存ドメインで Metadata Manager サービスが使用されている場合は、mm_files ディレクトリをコピーします。	mm_files ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリのデフォルトの場所から新しいインストールディレクトリにコピーします。
ドメインのアップグレード。	このアップグレードでは、ドメイン内のユーザーアカウントおよび管理者アカウントが保持されます。
Informatica サービスの開始。	ノード上で Informatica サービスを開始します。

- アプリケーションサービスをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインしてアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードでは、アップグレードが必要なすべてのアプリケーションサービスの一覧が表示されます。依存オブジェクトに必要な順序に基づいてサービスがアップグレードされます。
- Informatica クライアントをアップグレードします。クライアントインストーラを使用して次の Informatica クライアントツールをアップグレードします。

- PowerCenter Client
- Informatica Developer

Informatica クライアントをアップグレードするには、Informatica クライアントインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。クライアントが複数のマシンにインストールされている場合は、すべてのマシンのクライアントをアップグレードします。

- アップグレード後のタスクを実行します。

**注:** Informatica のインストールを複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、付録のアップグレードチェックリストを利用して実行できます。

## 第 2 章

# HotFix の適用

この章では、以下の項目について説明します。

- [HotFix のインストールおよびロールバックの概要, 13 ページ](#)
- [サービス HotFix の適用, 14 ページ](#)
- [サービス HotFix のロールバック, 22 ページ](#)
- [クライアント HotFix の適用, 25 ページ](#)
- [クライアント HotFix のロールバック, 28 ページ](#)

## HotFix のインストールおよびロールバックの概要

HotFix を適用した場合、既存のディレクトリのバックアップが作成された後に製品の新しいバージョンが適用され、必須の構成ファイルおよびランタイムファイルがリストアまたは更新されます。

Informatica では、Informatica サービスおよびクライアントに HotFix を適用するためのインストーラを提供しています。

Informatica HotFix を適用またはロールバックするには、次の手順を実行します。

1. 準備作業を完了します。HotFix を適用またはロールバックする前に、ドメインをシャットダウンしてください。マルチノード構成の場合は、すべてのノードをシャットダウンする必要があります。
2. グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードで HotFix を Informatica サービスに適用するかロールバックします。
3. Informatica サービスの最終タスクを完了します。サーバーコンポーネントをインストールした後に、ゲートウェイノードでドメインを起動します。
4. ホットフィックスを、グラフィカルモードまたはサイレントモードで Informatica クライアントに適用します。ホットフィックスを Informatica Developer に適用している場合は、Informatica クライアントのホットフィックスのバージョンが、Informatica サービスのホットフィックスのバージョンと一致することを確認してください。

**注:** Informatica クライアントのホットフィックスバージョンが Informatica サービスのホットフィックスに一致しない場合、Informatica Developer はドメインに接続できません。

HotFix をロールバックする場合、Informatica のバージョンが、以前にインストールされたバージョンにリストアされます。

# サービス HotFix の適用

HotFix を適用すると、既存のディレクトリのバックアップが作成された後に製品の新しいバージョンが適用され、必須の設定ファイルおよびランタイムファイルがリストアまたは更新されます。

インストーラを実行すると、HotFix を Informatica サービスおよびクライアントに適用できます。

## HotFix を適用する前に

インストーラを実行して HotFix を適用する前に、次の前提条件のタスクを実行します。

### ディストリビューションパッケージの確認

#### ディストリビューションパッケージ要件の確認

Informatica ドメインとクライアントでは、Informatica ドメイン内で複合ファイル进行处理したり、Hadoop または Databricks 環境に接続して Informatica ドメイン内で処理したり、処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュしたりするために、ディストリビューションパッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager (パッケージマネージャ) を使用していつでもインストールできます。

Informatica ドメイン内で複合ファイル进行处理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュする場合にサポートされるディストリビューションパッケージについては、[Product Availability Matrix](#) を参照してください。

### インストーラファイルのダウンロード

#### インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。Informatica インストール tar ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードします。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

**注:** 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

1. 使用している製品用の HotFix パッケージをダウンロードします。
2. ZIP 形式または TAR 形式の HotFix パッケージの内容を解凍します。

**注:** Windows では、.zip ファイル名を含めたインストールパスの長さを 60 文字以下にする必要があります。UNIX では、ネイティブの tar または GNU tar コマンドを使用してインストーラファイルを抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルのあるディレクトリの読み取り/書き込みアクセス権と install.sh の実行アクセス権を与えられている必要があります。

3. ディストリビューションパッケージをインストールする場合は、ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルをダウンロードします。

4. ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

**注:** ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

## チェックサムの検証

HotFix を適用する前に、インストーラパッケージのチェックサムを確認します。

サービスインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドで、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

## UNIX でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

次の表に、UNIX 用の Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_linux-x64.tar	2274480782	15115591680 バイト

## Windows でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

次の表に、Windows での Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_winem-64t.zip	3886124370	11714098082 バイト

## Linux でインストーラパッケージのチェックサムを確認

次の表に、Linux 用の Informatica サービスインストーラのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_linux-x64.tar	2274480782	15115591680 バイト

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

## HotFix のインストールの準備

以下の前提条件タスクを実行します。

1. コマンドプロンプトとコマンドラインプログラムを含む、インストールディレクトリとサブディレクトリにアクセスするすべてのプロセスを停止します。
2. HotFix を適用するすべてのマシンで Informatica クライアントを閉じます。
3. Informatica ディレクトリおよびサブディレクトリを閉じます。



4. リポジトリファイルとウェアハウスファイルをバックアップします。Administrator ツールから必要なりポジトリをバックアップしてください。HotFix をロールバックするときにこれらのファイルが必要になります。環境内の次のデータベースとファイルをバックアップします。
  - PowerCenter リポジトリ
  - モデルリポジトリ
  - Metadata Manager imm.properties ファイル
  - Metadata Manager ウェアハウス
  - Data Transformation ServiceDB ディレクトリ
5. ドメインのすべてのノード上の Informatica サービスを停止します。
6. infaservice shutdown コマンドを使用して、Informatica ドメインをシャットダウンします。デフォルトでは、infaservice 実行可能ファイルは次のディレクトリにあります: <Informatica インストールディレクトリ>/tomcat/bin。
7. マシンが Informatica Administrator への接続に HTTPS を使用する場合は、キーストアファイルがデフォルトの場所にあり、デフォルトのファイル名を使用していることを確認します。キーストアファイルのデフォルトの場所は<Informatica インストールディレクトリ>/tomcat/conf です。キーストアファイルのデフォルトのファイル名は Default.keystore です。
8. SKIP\_VENDOR\_CHECK 環境変数を true に設定して、UNIX の HotFix インストールから sudo プロンプトを削除します。

**注:** sudo 権限がない場合は、HotFix を適用するかロールバックする前に、環境変数を true に設定します。sudo 特権がある場合は、この環境変数を設定する必要はありません。

## グラフィカルモードでのサービス HotFix の適用

グラフィカルモードで HotFix を適用すると、コンソールウィンドウが開き、バックグラウンドで実行されます。このウィンドウを閉じると、インストールが停止します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。ユーザーアカウントは、以前のバージョンの Informatica サービスのインストールに使用したのと同じアカウントである必要があります。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. Windows でインストールを開始するには、HotFix パッケージを解凍または展開したルートディレクトリから、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat を右クリックし、**[管理者として実行]** を選択します。
4. Informatica 10.5.8 ページで **[Informatica 10.5、10.5.1、10.5.2、10.5.3、10.5.4、10.5.5、10.5.6、または 10.5.7 への HotFix の適用]** を選択し、**[開始]** をクリックします。

**[インストールタイプ]** ページが表示されます。
5. **[HotFix の適用]** を選択して、HotFix を適用します。
6. Informatica 製品使用状況ツールキットの利用規約をお読みになったら **[契約条項に同意します]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。

以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールで使用量コレクションを無効にできます。

**[インストールの前提条件]** ページが表示されます。

7. HotFix を適用する前にすべての要件を満たしていることを確認してから、**[次へ]** をクリックします。



[インストールディレクトリ] ページが表示されます。

8. Informatica サービスの現在のバージョンがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力し、インストール環境を指定します。
9. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。
10. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。
11. [次へ] をクリックします。

[Pre-Installation Summary (インストール前のサマリ)] ページが表示されます。

12. インストール情報を確認し、[インストール] をクリックして HotFix を適用します。  
インストーラにより Informatica ファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
13. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは [インストール後のサマリ] ページを確認して、HotFix が正常に完了したことを確認します。

## コンソールモードでのサービス HotFix の適用

HotFix をバージョン 10.5 または 10.5.x に適用するには、10.5.8 インストーラを実行します。

コンソールモードで HotFix を適用する場合、Help、Quit、および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使わないでください。

1. を使用してインストーラを実行します。/install.sh コマンドを実行します。
2. インストールの続行を確認するには、[Y] を押します。
3. HotFix を適用するオプションを選択するには、[5] を押します。
4. HotFix を適用するには、[1] を押します。
5. 利用規約に同意してライセンスを適用するには、[2] を押します。
6. HotFix の適用を続行する前に、すべてのインストール要件が満たされていることを確認します。
7. **Enter** キーを押します。
8. Informatica 10.5 または 10.5.x をインストールしたディレクトリを入力します。  
パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @|\* \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' "
9. インストールのタイプに応じて次のいずれかのオプションを選択します。
  - 最小限のユーザーしかいない概念実証用の基本環境の場合は、**1** を押して [Sandbox] 環境に設定します。
  - 設計環境の場合は、**2** を押して [Development] 環境に設定します。
  - プロダクション環境に最も近い大量処理の場合は、**3** を押して [Test] 環境に設定します。
  - エンドユーザー向けの高レベルの並列処理を行う大量処理の場合は、**4** を押して [Production] 環境に設定します。拡張プロダクション環境は一般的にマルチノードのセットアップです。デフォルトは **1** の [Sandbox] です。
10. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを選択します。
  - ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、**1** を押します。
  - インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、**2** を押します。

デフォルトは1です。

11. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを1つ以上選択します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。  
デフォルトは1です。
12. **Enter** キーを押します。
13. [インストール前のサマリ] でインストール情報を確認し、**[Enter]** キーを押して HotFix を適用します。  
インストーラにより Informatica ファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
14. [インストール後のサマリ] で、HotFix の適用が正常に完了したことを確認し、**[Enter]** キーを押してインストーラを終了します。

## サイレントモードでのサービス HotFix の適用

サイレントモードで HotFix を適用するには、SilentInput.properties ファイルを作成してから、インストーラを実行します。

Informatica は、インストーラで必要となるパラメータを含んだ、SilentInput\_hotFix.properties という名前のサンプルのプロパティファイルを提供しています。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput\_hotFix.properties ファイルの場所を確認します。
3. 変更する前に、そのファイルをバックアップします。
4. テキストエディタを使用してファイルを開き、値を変更します。次の表に変更可能なインストールプロパティを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	HotFix を適用するかロールバックするかを指定します。値が0の場合、現在の Informatica インストールに HotFix が適用されます。値が1の場合、インストーラによって現在の HotFix がロールバックされます。 Hotfix を適用するには、値を0に設定します。
USER_INSTALL_DIR	HotFix を適用またはロールバックする Informatica インストールのディレクトリ。 Informatica サービスに HotFix を適用するには、現在のバージョンの Informatica サービスがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力します。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、 <a href="https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html">https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html</a> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。使用統計値の送信を無効にする方法の詳細については、『Informatica Administrator ガイド』を参照してください。 HotFix を適用するには、値を「1」に設定する必要があります。

プロパティ名	説明
INSTALLATION_ENVIRONMENT	<p>HotFix を適用する場合は、Informatica サービスのインストールに関連付けられている環境タイプを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 最小限のユーザーしかいない概念実証用の基本環境の場合は、1 を押して[Sandbox]環境に設定します。</li> <li>• 設計環境の場合は、2 を押して[Development]環境に設定します。</li> <li>• プロダクション環境に最も近い大量処理の場合は、3 を押して[Test]環境に設定します。</li> <li>• エンドユーザー向けの高レベルの並列処理を行う大量処理の場合は、4 を押して[Production]環境に設定します。拡張プロダクション環境は一般的にマルチノードのセットアップです。</li> </ul> <p>デフォルトは 1 の [Sandbox] です。</p>
EDC_CATALOG_INST	Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールが必要となります。Hotfix を適用するノードでカタログサービスが実行されている場合は、このプロパティを true に設定します。
EDC_HF_BACKUP	EDC_CATALOG_INST=true と設定した場合は、Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールが必要となります。カタログのバックアップを作成した場合は、このプロパティを true に設定します。
EDC_BACK_UP_DIR	EDC_CATALOG_INST および EDC_HF_BACKUP プロパティを true と設定した場合は、Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールが必要となります。カタログデータのバックアップファイルの場所を入力します。
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を true に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を false に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。

5. 同じディレクトリに SilentInput.properties という名前でプロパティファイルを保存します。
6. サービスインストーラディレクトリのルートに移動します。
7. 編集し、保存した SilentInput.properties ファイルがディレクトリに含まれることを確認します。
8. Windows、UNIX、または Linux からインストールを開始します。
  - Windows で HotFix を適用するには、silentInstallHotFix.bat を管理者として実行します。管理者としてファイルを実行するには、ファイルを右クリックし、**【管理者として実行】**を選択します。
  - UNIX または Linux で HotFix を適用するには、silentInstallHotFix.sh ファイルをダブルクリックします。

インストーラにより Informatica ファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
9. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **【インストール後のサマリ】** ページを確認して、HotFix が正常に完了したことを確認します。

## サイレント入力プロパティのサンプル

次の例に、HotFix をサイレントモードで適用またはロールバックしたときの SilentInput.properties ファイルの内容を示します。

```
#####
# (C) Copyright Informatica LLC 1993, 2023.
# This software and documentation are provided only under a separate license agreement containing restrictions
on use and disclosure.
# This software is protected by patents as detailed at https://www.informatica.com/legal/patents.html
# A current list of Informatica trademarks is available on the web at https://www.informatica.com/
trademarks.html
# See the Informatica privacy policy at https://www.informatica.com/privacy-policy.html
#####

# Use the following guidelines when editing this file
# * Use this file to install without user interaction.
# * After you create the properties file, save the file with the name SilentInput.properties
# * Any error condition that leads to failure, such as an invalid
# installation directory, generates a log file in the user home
# directory. For example: /home/<user name>/silentErrorLog<time_stamp>.log

#####

# Set ENABLE_USAGE_COLLECTION to 1 to accept the product usage toolkit end user license agreement.
# You must set the value as 1 to install the Informatica platform.
# The product usage toolkit end user license agreement is available at: http://www.informatica.com/us/eula/en-
support-eula.aspx.
# As further described in the EULA, your use of the Informatica platform will enable the product usage toolkit
# to collect certain product usage and failure information. You may disable this feature at any time.
# For more information on how to disable this feature refer the Informatica Administrator Guide.

ENABLE_USAGE_COLLECTION=0

## *INSTALL_TYPE - Set this value to '0' to apply the hotfix. Set this value to '1' to roll back the hotfix.

INSTALL_TYPE=0

# * The USER_INSTALL_DIR variable must point to a valid directory with write
# permissions enabled.

USER_INSTALL_DIR=/home/Informatica/10.5

#The INSTALLATION_ENVIRONMENT property represents the installation environment
# Set the property to one of the following installation environment types: Sandbox, Development, Test, or
Production. Values are case-sensitive.
# Set to Sandbox for a basic environment used for proof of concept with minimal
users.
# Set to Development for the design environment.
# Set to Test for high volume processing that is closest to a production environment.
# Set to Production for high volume processing with high levels of concurrency meant for end users. Advanced
production environments are typically multi-node setups.

INSTALLATION_ENVIRONMENT=

# Required only for EDC installation
# Set EDC_CATALOG_INST=true if the Catalog Service is running on the node on which you want to apply or roll
back the hotfix.
EDC_CATALOG_INST=false

# Required only for EDC installation.
# Set EDC_HF_BACKUP=true if you have set EDC_CATALOG_INST=true and you have taken a backup of the catalog.
# Run the infacmd ldm backupContents command before you apply the hotfix (INSTALL_TYPE=0)
# Run the infacmd ldm restoreContents command after you rollback the hotfix (INSTALL_TYPE=1)
```

```

EDC_HF_BACKUP=false

# Enter the location of the backup file.
# Required for Enterprise Data Catalog installation when the EDC_CATALOG_INST and EDC_HF_BACKUP parameters are
# set to true
EDC_BACK_UP_DIR=

# The INSTALL_HADOOP_LIBRARIES property determines whether to install packages to integrate the domain with
# Hadoop or Databricks.
# Set INSTALL_HADOOP_LIBRARIES=true if you want to install the integration packages to push processing to
# Hadoop or Databricks, process complex files within the domain, or connect to Hadoop but process within the
# domain.
# Set INSTALL_HADOOP_LIBRARIES property only if INSTALL_TYPE=0
# If you don't install the integration packages now, you can install them later through Integration Package
# Manager.
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES=false

# The SELECTED_HADOOP_LIBRARIES property determines the integration packages that you want to install.
# Lists the supported integration packages and their versions.
# Set SELECTED_HADOOP_LIBRARIES property only if INSTALL_TYPE=0
# Enter the integration package that you want to install. Separate multiple packages with a comma.
# You can choose from the following options:
# 1->Azure HDInsight 5.1
# 2->Cloudera 7.1
# 3->Cloudera 7.2
# 4->Cloudera 7.218
# 5->Databricks 10.4
# 6->Databricks 11.3
# 7->Dataproc 2.0
# 8->Elastic MapReduce 6.4
# 9->Elastic MapReduce 7.1
# 10->MapR 7.2
# 11->Select all
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES=

```

## HotFix を適用した後に

インストーラを実行して HotFix を適用した後に、ドメインを起動し、必要な事後タスクを実行して HotFix の適用を完了します。

### アップグレードの設定の完了または HotFix の適用

odbc.ini、odbcinst.ini、sapnwrfc.ini、または infaservice.sh ファイルを以前に編集した場合は、バックアップファイルからの変更を最新のインストール済みファイルに手動でマージします。以前の Informatica バージョンの\*.ini ファイルをカスタマイズしたことがあるかどうかを管理者に確認してください。例えば、HotFix またはアップグレードを適用する前に、管理者がいくつかの変数または Java オプションを infaservice.sh スクリプトに追加した場合は、変更を最新のインストールファイルパスに手動でマージします。

HotFix の適用またはアップグレード後に、最新の構成の変更内容を次のインストールファイルパスに手動でマージします。

- <Informatica のインストールディレクトリ>/ODBC7.1/odbc.ini
- <Informatica のインストールディレクトリ> /ODBC7.1/odbcinst.ini
- <Informatica のインストールディレクトリ>/server/bin/sapnwrfc.ini
- <Informatica のインストールディレクトリ>/tomcat/bin/infaservice.sh

## バックアップの場所からのディストリビューションパッケージの削除

HotFix を適用した後、セキュリティの脆弱性を軽減するために、ディストリビューションパッケージをバックアップフォルダから削除します。

HotFix を適用すると、Informatica インストールディレクトリ内のすべての既存のファイルがバックアップされます。次の場所からディストリビューションパッケージのバックアップを削除する必要があります：

<Informatica インストールディレクトリ>\BACK\_FROM\_<HotFix バージョン番号>\services\shared\hadoop\<ディストリビューションパッケージ\_バージョン>

次の例は、HotFix を適用した場合のディストリビューションパッケージのバックアップの場所を示しています：  
す：C:\Informatica\BACK\_FROM\_3\services\shared\hadoop\EMR\_6.4

**注：**削除プロセスでは、ディストリビューションパッケージのすべてのファイルがバックアップフォルダから削除されるわけではありません。一部のファイルは次の場所にまだ存在している場合があります：<Informatica インストールディレクトリ>\BACK\_FROM\_<HotFix バージョン番号>\services\shared\ これらのファイルは手動で削除できます。

**重要：**HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

## Cognos JAR ファイルの更新

Metadata Manager を手動でインストールする場合は、Cognos 依存関係に関連付けられた JAR ファイルを置き換える必要があります。

1. 次の JAR ファイルをダウンロードします。
  - <https://repo1.maven.org/maven2/org/apache/axis/axis/1.4/axis-1.4.jar>
  - <https://repo1.maven.org/maven2/xerces/xercesImpl/2.12.2/xercesImpl-2.12.2.jar>
2. JAR ファイルを次の場所にコピーします：<Metadata Manager Agent installation directory>\java\CognosRepository
3. Metadata Manager Agent サービスを開始します。

# サービス HotFix のロールバック

必要に応じて、HotFix をロールバックできます。HotFix をロールバックするには、インストーラを実行します。

## グラフィカルモードでのサービス HotFix のロールバック

グラフィカルモードで HotFix をロールバックすると、コンソールウィンドウが開き、バックグラウンドで実行されます。このウィンドウを閉じると、ロールバックが停止します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。ユーザーアカウントは、以前のバージョンの Informatica サービスのインストールに使用したのと同じアカウントである必要があります。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. Windows でインストールを開始するには、HotFix パッケージを解凍または展開したルートディレクトリから、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat を右クリックし、**【管理者として実行】**を選択します。

4. Informatica 10.5.8 ページで **[Informatica 10.5、10.5.1、10.5.2、10.5.3、10.5.4、10.5.5、10.5.6、または 10.5.7 への HotFix の適用]** を選択し、**[開始]** をクリックします。  
**[インストールタイプ]** ページが表示されます。
5. **[HotFix のロールバック]** を選択して、HotFix をロールバックします。
6. Informatica 製品使用状況ツールキットの利用規約をお読みになったら **[契約条項に同意します]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。  
  
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、  
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールで使用量コレクションを無効にできます。  
**[インストールの前提条件]** ページが表示されます。
7. Hotfix をロールバックする前にすべての要件を満たしていることを確認し、**[次へ]** をクリックします。  
**[インストールディレクトリ]** ページが表示されます。
8. Informatica サービスの現在のバージョンがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力し、**[次へ]** をクリックします。  
**[インストール前のサマリ]** ページが表示されます。
9. インストール情報を確認し、**[インストール]** をクリックして HotFix をロールバックします。  
インストーラは HotFix を削除し、Informatica を以前のバージョンに復元します。
10. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **[インストール後のサマリ]** ページを確認して、ロールバックが正常に完了したことを確認します。  
  
**重要:** HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

## コンソールモードでのサービス HotFix のロールバック

適用した HotFix をロールバックできます。コンソールモードで HotFix をロールバックするには、インストーラを実行します。

1. を使用してインストーラを実行します。/install.sh コマンドを実行します。
2. インストールの続行を確認するには、**[Y]** を押します。
3. HotFix をロールバックするには、**[5]** を押します。
4. HotFix をロールバックするには、**[2]** を押します。
5. ライセンスを適用するには、**[2]** を押します。
6. 前提条件を確認し、**Enter** キーを押します。
7. Informatica をインストールしたディレクトリを入力して、**Enter** キーを押します。
8. インストール前のサマリで、**Enter** キーを押して続行します。
9. ロールバックが正常に完了した後に、**Enter** キーを押してインストーラを終了します。

**重要:** HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。



## サイレントモードでのサービス HotFix のロールバック

サイレントモードで HotFix をロールバックするには、SilentInput.properties ファイルを更新してから、サイレントインストーラを実行します。

Informatica では、インストーラで必要となるパラメータを含むサンプルのプロパティファイル (SilentInput\_hotFix.properties) を提供しています。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput\_hotFix.properties ファイルの場所を確認します。
3. 変更する前に、そのファイルをバックアップします。
4. テキストエディタを使用してファイルを開き、値を変更します。次の表に変更可能なインストールプロパティを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	HotFix を適用するかロールバックするかを指定します。 現在の HotFix をロールバックするには、値を 1 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	HotFix をロールバックする Informatica インストールのディレクトリ。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、 <a href="https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html">https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html</a> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。使用統計値の送信を無効にする方法の詳細については、『 <i>Informatica Administrator ガイド</i> 』を参照してください。 Hotfix をロールバックするには、値を 1 に設定する必要があります。
INSTALLATION_ENVIRONMENT	ロールバック中はこのプロパティを無視できます。
EDC_CATALOG_INST	Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールに必要となります。 Hotfix を適用するノードでカタログサービスが実行されている場合は、このプロパティを true に設定します。
EDC_HF_BACKUP	EDC_CATALOG_INST=true と設定した場合は、Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールに必要となります。カタログのバックアップを作成した場合は、このプロパティを true に設定します。
EDC_BACK_UP_DIR	EDC_CATALOG_INST および EDC_HF_BACKUP プロパティを true と設定した場合は、Enterprise Data Catalog、Data Privacy Management、および Enterprise Data Preparation のインストールに必要となります。カタログデータのバックアップファイルの場所を入力します。

5. プロパティファイルを「SilentInput.properties」という名前で保存します。
6. Informatica サービスのインストーラディレクトリのルートに移動します。
7. 編集し、保存した SilentInput.properties ファイルがディレクトリに含まれることを確認します。
8. Windows、UNIX、または Linux からインストールを開始します。



- Windows で HotFix をロールバックするには、silentInstallHotFix.bat を管理者として実行します。管理者としてファイルを実行するには、ファイルを右クリックし、**【管理者として実行】** を選択します。
- UNIX または Linux で HotFix をロールバックするには、silentInstallHotFix.sh をダブルクリックします。

インストーラによって最後の HotFix が削除され、以前のバージョンの Informatica サービスにリストアされます。

9. ロールバック後のタスクを完了します。ログファイルまたは **【インストール後のサマリ】** ページを確認して、ロールバックが正常に完了したことを確認します。

**重要:** HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

## クライアント HotFix の適用

HotFix を適用すると、既存のディレクトリのバックアップが作成された後にクライアントの新しいバージョンが適用され、必須の構成ファイルおよびランタイムファイルがリストアまたは更新されます。

クライアントインストーラを実行すると、使用する Informatica クライアントに HotFix を適用できます。HotFix を適用した後、ディストリビューションパッケージのバックアップファイルをバックアップフォルダから削除できます。

## グラフィカルモードでのクライアント HotFix の適用

グラフィカルモードでインストーラを実行すると、コンソールウィンドウが開き、バックグラウンドで実行されます。このウィンドウを閉じると、インストールが停止します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。ユーザーアカウントは、以前のバージョンの Informatica サービスのインストールに使用したのと同じアカウントである必要があります。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストールを開始するには、クライアント HotFix のインストールパッケージを解凍または展開したルートディレクトリから install.bat を実行します。
4. Informatica 10.5.8 ページで、**【バージョン 10.5、10.5.1、10.5.2、10.5.3、10.5.4、10.5.5、10.5.6、または 10.5.7 に HotFix を適用するか HotFix をロールバックする】** を選択し、**【開始】** をクリックします。

**【インストールタイプ】** ページが表示されます。

5. **【HotFix の適用】** を選択して、HotFix を適用します。
6. HotFix の適用を続行する前にすべての要件を満たしていることを確認してから、**【次へ】** をクリックします。

**【インストールディレクトリ】** ページが表示されます。

7. Informatica クライアントの現在のバージョンがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力し、インストール環境を指定して、**【次へ】** をクリックします。
8. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。
9. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。

10. **【次へ】** をクリックします。  
**【Pre-Installation Summary (インストール前のサマリ)】** ページが表示されます。
11. インストール情報を確認し、**【インストール】** をクリックして HotFix を適用します。  
インストーラにより Informatica ファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
12. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **【インストール後のサマリ】** ページを確認して、HotFix が正常に完了したことを確認します。

## サイレントモードでのクライアント HotFix の適用

サイレントモードで HotFix を適用するには、SilentInput.properties ファイルを作成してから、インストーラを実行します。

Informatica は、インストーラで必要となるパラメータを含んだ、SilentInput\_hotFix.properties という名前のサンプルのプロパティファイルを提供しています。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput\_hotFix.properties ファイルの場所を確認します。
3. 変更する前に、そのファイルをバックアップします。
4. テキストエディタを使用してファイルを開き、値を変更します。次の表に変更可能なインストールプロパティを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	HotFix を適用するかロールバックするかを指定します。値が 0 の場合、インストーラによって現在の Informatica クライアントインストールに HotFix が適用されます。値が 1 の場合、インストーラによって現在の HotFix がロールバックされます。 Hotfix を適用するには、値を 0 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	HotFix を適用またはロールバックする Informatica クライアントインストールのディレクトリ。 HotFix を適用するには、現在のバージョンの Informatica クライアントがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力します。
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を true に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を false に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。

5. 同じディレクトリに SilentInput.properties という名前でプロパティファイルを保存します。
6. silentInstallHotFix.bat をダブルクリックして HotFix を適用します。  
インストーラによって、Informatica クライアントファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
7. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **【インストール後のサマリ】** ページを確認して、HotFix が正常に完了したことを確認します。

## サイレント入力プロパティのサンプル

次の例に、HotFix クライアントをサイレントモードで適用またはロールバックしたときの SilentInput.properties ファイルの内容を示します。

```
#####
# Informatica Installer Build Details
# Copyright (c) 1993-2023 Informatica LLC
# This software contains confidential and proprietary
# information of Informatica LLC.
# All Rights Reserved.
#####

# Use the following guidelines when editing this file
# * Use this file to install without user interaction.
# * After you create the properties file, save the file with the name SilentInput.properties
# * Any error condition that leads to failure, such as an invalid
# installation directory, generates a log file in the user home directory.
# For example: c:\silentErrorLog<time_stamp>.log

#####

#####
## *INSTALL_TYPE - Set this value to '0' to apply the hotfix. Set this value to '1' to roll back the hotfix.

INSTALL_TYPE=0

# * The USER_INSTALL_DIR variable must point to a valid directory with write
# permissions enabled.

USER_INSTALL_DIR=c:\Informatica\10.5

#####
# After you create the properties file, save the file with the name SilentInput.properties and
# run the silent installer to perform the Informatica client installation.
#####
```

## バックアップの場所からのディストリビューションパッケージの削除

HotFix を適用した後、セキュリティの脆弱性を軽減するために、ディストリビューションパッケージをバックアップフォルダから削除します。

HotFix を適用すると、Informatica インストールディレクトリ内のすべての既存のファイルがバックアップされます。次の場所からディストリビューションパッケージのバックアップを削除する必要があります：

<Informatica インストールディレクトリ>\BACK\_FROM\_<HotFix バージョン番号>\clients\DeveloperClient\hadoop\<ディストリビューションパッケージ\_バージョン>

次の例は、HotFix を適用した場合のディストリビューションパッケージのバックアップの場所を示しています：C:\Informatica\BACK\_FROM\_3\clients\DeveloperClient\hadoop\EMR\_6.4

**注：**削除プロセスでは、ディストリビューションパッケージのすべてのファイルがバックアップフォルダから削除されるわけではありません。一部のファイルは次の場所にまだ存在している場合があります：<Informatica インストールディレクトリ>\BACK\_FROM\_<HotFix バージョン番号>\clients\DeveloperClient\ これらのファイルは手動で削除できます。

**重要：**HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

# クライアント HotFix のロールバック

必要に応じて、HotFix をロールバックできます。HotFix をロールバックするには、必要な前提条件のタスクを実行してから、インストーラを実行します。

## グラフィカルモードでのクライアント HotFix のロールバック

グラフィカルモードでインストーラを実行すると、コンソールウィンドウが開き、バックグラウンドで実行されます。このウィンドウを閉じると、ロールバックが停止します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。ユーザーアカウントは、以前のバージョンの Informatica サービスのインストールに使用したのと同じアカウントである必要があります。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストールを開始するには、クライアント HotFix のインストールパッケージを解凍または展開したルートディレクトリから install.bat を実行します。
4. Informatica 10.5.8 ページで、**バージョン 10.5、10.5.1、10.5.2、10.5.3、10.5.4、10.5.5、10.5.6、または 10.5.7 に HotFix を適用するか HotFix をロールバックする** を選択し、**開始** をクリックします。  
[インストールタイプ] ページが表示されます。
5. **[HotFix のロールバック]** を選択して、HotFix をロールバックします。
6. ロールバックを続行する前にすべての要件を満たしていることを確認してから、**次へ** をクリックします。  
[インストールディレクトリ] ページが表示されます。
7. Informatica クライアントの現在のバージョンがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力してから、**次へ** をクリックします。  
[インストール前のサマリ] ページが表示されます。
8. インストール情報を確認し、**インストール** をクリックして HotFix をロールバックします。  
インストーラによって最後の HotFix が削除され、Informatica クライアントが以前のバージョンにリストアされます。
9. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **[インストール後のサマリ]** ページを確認して、ロールバックが正常に完了したことを確認します。  
**重要:** HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

## サイレントモードでのクライアント HotFix のロールバック

サイレントモードで HotFix をロールバックするには、SilentInput.properties ファイルを作成し、このファイルを指定してインストーラを実行します。

Informatica は、インストーラで必要となるパラメータを含んだ、SilentInput\_hotFix.properties という名前のサンプルのプロパティファイルを提供しています。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput\_hotFix.properties ファイルの場所を確認します。
3. 変更する前に、そのファイルをバックアップします。

4. テキストエディタを使用してファイルを開き、値を変更します。次の表に変更可能なインストールプロパティを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	HotFix を適用するかロールバックするかを指定します。値が 0 の場合、インストーラによって現在の Informatica クライアントインストールに HotFix が適用されます。値が 1 の場合、インストーラによって現在の HotFix がロールバックされます。 HotFix をロールバックするには、値を 1 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	HotFix をロールバックする Informatica クライアントインストールのディレクトリ。 現在のバージョンの Informatica クライアントがインストールされているディレクトリの絶対パスを入力します。

5. 同じディレクトリに SilentInput.properties という名前でプロパティファイルを保存します。
6. Windows で Hotfix をロールバックするには、silentInstallHotFix.bat ファイルをダブルクリックします。インストーラによって最後の HotFix が削除され、以前のバージョンの Informatica クライアントにリストアされます。
7. インストール後のタスクを完了します。ログファイルまたは **【インストール後のサマリ】** ページを確認して、ロールバックが正常に完了したことを確認します。

**重要:** HotFix をロールバックすると、ディストリビューションパッケージはリストアされません。ロールバックされたバージョンでは、Hadoop または Databricks ディストリビューションパッケージに関連付けられている機能を有効にすることはできません。ディストリビューションパッケージをインストールするには、Informatica グローバルカスタマサポートにご連絡ください。

## 第 3 章

# Linux でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 30 ページ](#)
- [システム要件の確認, 30 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 35 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 36 ページ](#)
- [構成ファイルのバックアップ, 37 ページ](#)

## リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

## システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## 一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

### 一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

次の表に、PowerCenter または Data Engineering 製品をインストールするための最小ディスク容量とメモリ要件を示します。

オプション	最小要件
インストーラを実行するための一時ディスク領域	1GB のディスク容量
Data Engineering 製品のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、8GB RAM、8 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。
PowerCenter のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、4GB RAM、6 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。

### 一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

Informatica ドメインをアップグレードするには、50GB 以上のディスク容量と 6GB の RAM があることを確認してください。

**注:** アップグレードする際、既存の infa\_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップも必要になります。また、暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。生成されたサイトキーは、各ノードにコピーするか、各ノードからアクセスできる共有の場所に配置する必要があります。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードする必要があります。ドメインのアップグレード後、必ずサイトキーを移行してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

### サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

## パッチ要件の確認 Linux の場合

Informatica サービスをインストールする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチとライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

### Linux 上の PowerCenter

次の表に、Linux 上の PowerCenter で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
AWS Linux	Linux 2 - 20241113.1	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs-libs-1.42.9-19.amzn2.x86_64</li><li>- keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64</li><li>- libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64</li><li>- libselineux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64</li></ul>
Ubuntu	20.04.1	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed]</li><li>- libkeyutils1/focal,now 1.6-6ubuntu1 amd64 [installed,automatic]</li><li>- libselineux1/focal,now 3.0-1build2 amd64 [installed,automatic]</li><li>- libsepol1/focal,now 3.0-1 amd64 [installed,automatic]</li></ul>
Ubuntu	22.04	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs/focal,now 1.46.5-2ubuntu1.1 amd64 [installed]</li><li>- libkeyutils3/focal,now 1.6.1-2ubuntu1 amd64 [installed,automatic]</li><li>- libselineux1/focal,now 3.3-1build2 amd64 [installed,automatic]</li><li>- libsepol1/focal,now 2.7-1ubuntu0.1 amd64 [installed,automatic]</li></ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el7</li><li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el7</li><li>- libselineux-&lt;version&gt;.el7</li><li>- libsepol-&lt;version&gt;.el7</li></ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 8	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el8</li><li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el8</li><li>- libselineux-&lt;version&gt;.el8</li><li>- libsepol-&lt;version&gt;.el8</li></ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 9	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"><li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el9</li><li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el9</li><li>- libselineux-&lt;version&gt;.el9</li><li>- libsepol-&lt;version&gt;.el9</li></ul>



プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 5
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 15	Service Pack 6

## Linux 上の Data Engineering

次の表に、Linux 上で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
AWS Linux	Linux 2 - 20241113.1	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs-libs-1.42.9-12.amzn2.0.2.x86_64</li> <li>- keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64</li> <li>- libselinux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64</li> <li>- libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64</li> </ul>
Ubuntu	20.04.1	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed]</li> <li>- libkeyutils1/focal,now 1.6-6ubuntu1 amd64 [installed,automatic]</li> <li>- libselinux1/focal,now 3.0-1build2 amd64 [installed,automatic]</li> <li>- libsepol1/focal,now 3.0-1 amd64 [installed,automatic]</li> </ul>
Ubuntu	22.04	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs/focal,now 1.46.5-2ubuntu1.1 amd64 [installed]</li> <li>- libkeyutils3/focal,now 1.6.1-2ubuntu1 amd64 [installed,automatic]</li> <li>- libselinux1/focal,now 3.3-1build2 amd64 [installed,automatic]</li> <li>- libsepol1/focal,now 2.7-1ubuntu0.1 amd64 [installed,automatic]</li> </ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	次のすべてのパッケージ。 <version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el7</li> <li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el7</li> <li>- libselinux-&lt;version&gt;.el7</li> <li>- libsepol-&lt;version&gt;.el7</li> </ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 8	次のすべてのパッケージ。 <version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el8</li> <li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el8</li> <li>- libselinux-&lt;version&gt;.el8</li> <li>- libsepol-&lt;version&gt;.el8</li> </ul>
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 9	次のすべてのパッケージ。 <version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- e2fsprogs-libs-&lt;version&gt;.el9</li> <li>- keyutils-libs-&lt;version&gt;.el9</li> <li>- libselinux-&lt;version&gt;.el9</li> <li>- libsepol-&lt;version&gt;.el9</li> </ul>
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 5
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 15	Service Pack 6

## ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX

Informatica ドメインを Hadoop 環境または Databricks 環境と統合するために、サードパーティのディストリビューションパッケージを使用できます。

Informatica ドメインとクライアントでは、Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理したり、Hadoop または Databricks 環境に接続して Informatica ドメイン内で処理したり、処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュしたりするために、ディストリビューションパッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager（パッケージマネージャ）を使用していつでもインストールできます。

### Informatica ドメイン内での処理

Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerCenter 用 PowerExchange for Hadoop
- PowerExchange for HBase
- PowerExchange for HDFS
- PowerExchange for Hive
- PowerExchange for JDBC V2
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for MapR-DB
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

### Hadoop または Databricks 環境での処理

処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュする場合、Informatica ドメインとクライアントにはディストリビューションパッケージが必要です。サポートされているディストリビューションパッケージの詳細については、『[Product Availability Matrix](#)』を参照してください。

## 環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
SKIP_VENDOR_CHECK	環境変数を構成して Linux または AIX へのインストーラから sudo プロンプトを削除します。 環境変数を true に設定すると Linux または AIX に対するアップグレードインストーラから sudo プロンプトが削除されます。 注: sudo 権限がない場合は、アップグレードする前に環境変数を true に設定します。sudo 権限がある場合は、環境変数を設定する必要はありません。

## インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

**注:** マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

**注:** ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

## Linux でインストーラパッケージのチェックサムを確認

Informatica サービスのアップグレードインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Linux 用の Informatica サービスインストーラのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_linux-x64.tar	2274480782	15115591680 バイト

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータ エラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

## Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

**注:** ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります。それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。  
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。

環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。

5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。  
**【ようこそ】** セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。  
**【インストールディレクトリ】** セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。  
**【ドメインおよびノードの設定】** セクションが表示されます。
10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。  
**【Informatica Upgrade Advisor のサマリ】** セクションが表示されます。
12. Advisor の結果をログファイル (Summary\_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

## 構成ファイルのバックアップ

いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップします。

## 第 4 章

# UNIX でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 38 ページ](#)
- [システム要件の確認, 38 ページ](#)
- [UNIX でのパッチ要件の確認, 39 ページ](#)
- [Java Runtime Environment のインストール \(AIX の場合\) , 39 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 39 ページ](#)
- [ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX, 40 ページ](#)
- [環境変数の確認, 41 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 42 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 43 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 43 ページ](#)
- [構成ファイルのバックアップ, 45 ページ](#)

## リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

## システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## UNIX でのパッチ要件の確認

Informatica サービスをインストールする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチとライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

## Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合)

Informatica には、AIX 対応の Java ライブラリは付属していません。AIX に Informatica をインストールする場合は、事前に Java Runtime Environment ビルド 8.0.8.10 - pap6480sr8fp10-20230703\_02(SR8 FP10)をダウンロードする必要があります。

java8\_64\_installp\_8.0.0.810.tar.gz ファイルをダウンロードしてください。

JRE のインストール中にエラーが発生する場合は、JRE ベンダーにお問い合わせください。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

## ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

Informatica ドメインをアップグレードするには、50GB 以上のディスクスペースと 6GB の RAM があることを確認してください。

**注:** アップグレードする際、既存の infa\_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## 一時的なディスク容量の要件

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートする、マシンに十分な利用可能なディスク容量があることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

インストーラを実行するには、1 GB の一時ディスク容量が必要です。

## サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

## ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX

Informatica ドメインを Hadoop 環境または Databricks 環境と統合するために、サードパーティのディストリビューションパッケージを使用できます。

Informatica ドメインとクライアントでは、Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理したり、Hadoop または Databricks 環境に接続して Informatica ドメイン内で処理したり、処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュしたりするために、ディストリビューションパッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager（パッケージマネージャ）を使用していつでもインストールできます。

### Informatica ドメイン内での処理

Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerCenter 用 PowerExchange for Hadoop
- PowerExchange for HBase
- PowerExchange for HDFS
- PowerExchange for Hive
- PowerExchange for JDBC V2
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for MapR-DB
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage



- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

## Hadoop または Databricks 環境での処理

処理を Hadoop または Databricks 環境にプッシュする場合、Informatica ドメインとクライアントにはディストリビューションパッケージが必要です。サポートされているディストリビューションパッケージの詳細については、『[Product Availability Matrix](#)』を参照してください。

# 環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、UNIX 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_JRE_HOME	サポートされている Java Runtime Environment (JRE) が含まれているフォルダの場所。Informatica を AIX にインストールする場合は、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定します。 シェルの構成ファイル、例えば .bashrc ファイルでは、INFA_JRE_HOME 環境変数を JRE が含まれるディレクトリに設定します。ログインシェルが INFA_JRE_HOME 環境変数にアクセスできることを確認します。
JRE_HOME	Informatica サービスを UNIX マシンにインストールする場合、インストールを開始する前に環境変数 JRE_HOME をクリアします。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。

変数	説明
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
SKIP_VENDOR_CHECK	環境変数を構成して UNIX へのインストーラから sudo プロンプトを削除します。 環境変数を true に設定すると UNIX に対するアップグレードインストーラから sudo プロンプトが削除されます。 <b>注:</b> sudo 権限がない場合は、アップグレードする前に環境変数を true に設定します。sudo 権限がある場合は、環境変数を設定する必要はありません。

## 最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスが使用しているヒープサイズが、ドメイン内のユーザー数に対する必要な最大ヒープサイズであることを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1~5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6~10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

**注:** この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。

ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。
4. テキスト「INFA\_JAVA\_OPTS=% INFA\_JAVA\_OPTS% -XX」を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。  
例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。  
set INFA\_JAVA\_OPTS=% INFA\_JAVA\_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m

# インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

**注:** マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

**注:** ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

## UNIX でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

サービスインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドで、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、UNIX 用の Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_linux-x64.tar	2274480782	15115591680 バイト

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

## Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

**注:** ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります。それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。  
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。  
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。  
[ようこそ] セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。  
[インストールディレクトリ] セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。  
[ドメインおよびノードの設定] セクションが表示されます。
10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /`
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。  
[Informatica Upgrade Advisor のサマリ] セクションが表示されます。

12. Advisor の結果をログファイル (Summary\_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

## 構成ファイルのバックアップ

いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップします。

## 第 5 章

# Windows でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 46 ページ](#)
- [システム要件の確認, 46 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 47 ページ](#)
- [ディストリビューションパッケージ要件の確認 \(Windows\) , 48 ページ](#)
- [環境変数の確認, 49 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 50 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 50 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 51 ページ](#)

## リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

## システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

# ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

以下の表に、Informatica ドメインのアップグレードに必要な最小のメモリおよびディスク容量を示します。

RAM	ディスクスペース
6GB	50GB

**注:** アップグレードする際、既存の infa\_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

次の表に、Informatica クライアントツールを実行するための最小システム要件を示します。

クライアント	プロセッサ	RAM	ディスクスペース
PowerCenter Client	1 CPU	1 GB	3 GB

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップも必要になります。また、暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。生成されたサイトキーは、各ノードにコピーするか、各ノードからアクセスできる共有の場所に配置する必要があります。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードする必要があります。ドメインのアップグレード後、必ずサイトキーを移行してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## 一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

### 一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

次の表に、PowerCenter または Data Engineering 製品をインストールするための最小ディスク容量とメモリ要件を示します。

オプション	最小要件
インストーラを実行するための一時ディスク領域	1GB のディスク容量
Data Engineering 製品のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、8GB RAM、8 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。
PowerCenter のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、4GB RAM、6 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。

#### 一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

## サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

## ディストリビューションパッケージ要件の確認 (Windows)

ドメインとクライアントでは、ドメイン内で複合ファイルを処理したり、Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks に接続したりするために、統合パッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager (パッケージマネージャ) を使用していつでもインストールできます。

Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。



次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

## 環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、Windows 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
%TEMP%	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 デフォルトのドライブに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。

## 最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスがドメイン内のユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズを使用しているかどうかを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1～5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6～10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

**注:** この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。
4. テキスト「INFA\_JAVA\_OPTS=% INFA\_JAVA\_OPTS% -XX」を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。  
例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。

```
set INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m
```

## インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

**注:** マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

**注:** ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

## Windows でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

サービスインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Windows での Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_server_winem-64t.zip	3886124370	11714098082 バイト

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合や、ディスク上のファイルのデータが破損した場合に起こる可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、『[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#)』を参照してください。

## Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

**注:** ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります。それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。

**Informatica 10.5.8** ページが表示されます。

4. **【Informatica 10.5.5.1Informatica 10.5.8** を選択します。

デフォルトでは、**【Informatica Upgrade Advisor を実行します】** がオンになっています。この場合、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

5. **【開始】** をクリックします。  
**【ようこそ】** ページが表示されます。
6. **【次へ】** をクリックします。  
**【インストールディレクトリ】** ページが表示されます。
7. 現在のインストールディレクトリを入力します。
8. **【次へ】** をクリックします。  
**【ドメインおよびノードの設定】** ページが表示されます。
9. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。

10. **【次へ】** をクリックします。  
**【Infomatica Upgrade Advisor のサマリ】** ページが表示されます。
11. Advisor の結果をログファイル (Summary\_<timestamp>.log) で確認します。
12. **【完了】** をクリックして、Infomatica Upgrade Advisor を閉じます。

## 第 6 章

# アップグレードの準備

この章では、以下の項目について説明します。

- [データトランスフォーメーションファイルのバックアップ, 53 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリの準備, 54 ページ](#)
- [モデルリポジトリのバックアップ, 54 ページ](#)
- [データ統合サービスの準備, 54 ページ](#)
- [Profiling ウェアハウスの準備, 54 ページ](#)
- [参照データのディレクトリの準備, 55 ページ](#)
- [Metadata Manager の準備, 55 ページ](#)
- [データベースのバックアップ, 56 ページ](#)
- [ドメインの準備, 56 ページ](#)

## データトランスフォーメーションファイルのバックアップ

アップグレードの前に、以前のバージョンで作成されたデータトランスフォーメーションファイルをバックアップする必要があります。アップグレードの完了後、新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

以下の表に、バックアップする必要があるファイルまたはディレクトリを示します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
構成ファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CMConfig.xml
ライセンスファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CDELicense.cfg

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

## PowerCenter リポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、PowerCenter リポジトリをバックアップします。

PowerCenter リポジトリをバックアップするには、Administrator ツールの PowerCenter リポジトリサービスを選択します。[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] を選択します。

## モデルリポジトリのバックアップ

Administrator ツールを使用して、モデルリポジトリのコンテンツをバックアップします。

モデルリポジトリをバックアップするには、Administrator ツールで [モデルリポジトリサービス] を選択します。次に、[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] の順にクリックします。

## データ統合サービスの準備

ドメインをアップグレードする前に、すべての実行中のジョブが完了していることを確認します。データ統合サービスは、アップグレードプロセス中にユーザーが中断したワークフローをリカバリできません。

## Profiling ウェアハウスの準備

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

## 参照データのディレクトリの準備

参照データファイルをデフォルト以外のディレクトリにインストールまたはコピーする場合は、アップグレードする前にディレクトリをバックアップします。

参照データファイルをインストールディレクトリ構造の外部のディレクトリにインストールまたはコピーする場合、ディレクトリをバックアップする必要はありません。

デフォルトでは、アップグレード操作によって以下の参照データディレクトリの内容が保持されます。

- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA\_Content/dictionaries/  
参照ディクショナリファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA\_Content/av/  
アドレス参照データファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA\_Content/identity/  
ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリ。

アップグレード後にディレクトリ構造にディレクトリをリストアできるように、ディレクトリの場所を記録します。

## Metadata Manager の準備

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager を準備します。

1. Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
2. Metadata Manager サービスを無効にします。
3. Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

## Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

ネイティブのデータベースバックアップオプションを使用するか、または Metadata Manager の mmRepoCmd というコマンドラインプログラムを使用して、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

mmRepoCmd には、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップおよびリストアするためのコマンドが含まれます。mmRepoCmd は次のディレクトリにあります。

<Informatica サービスのインストールディレクトリ>\services\MetadataManagerService\utilities\mmrepocmd

Metadata Manager ウェアハウスをバックアップするには、mmRepoCmd backupRepository コマンドを使用します。backupRepository コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
mmRepoCmd backupRepository
[<-dn|--domainName> domainName]
[<-hp|--gateway> gateway_host1:port gateway_host2:port...]
[<-mm|--mmServiceName> mmServiceName]
<<-url> http(s)://<host>:<port>>
<<-u|--user> user>
[-ep|--encryptedPassword]
[-pw|--password> password]
[<-n|--namespace> namespace]
[<-kt|--keyTab> keyTab]
<<-f|--file> file>
[<-nt|--numThreads> numThreads]
```

## Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica のインストールディレクトリ>\services\shared\jars\pc\classes

## データベースのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。

## ドメインの準備

ドメインをアップグレードする前に、ドメインを準備するための手順を実行します。

### ドメインのシャットダウン

ドメインをシャットダウンする前に、すべてのアプリケーションサービスを停止できます。ドメインをバックアップしてからアップグレードする前に、ドメインをシャットダウンする必要があります。

ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。

サポートされている環境に応じて、次のいずれかの方法を使用して、各ノードの Informatica サービスプロセスを停止できます。

- Informatica を Windows の [スタート] メニューから停止するには、[プログラム] > [Informatica[バージョン]] > [サーバー] > [Informatica サービスの停止] の順にクリックします。
- UNIX 上で Informatica を停止するには、*infaservice* コマンドを使用します。デフォルトでは、実行可能ファイル *infaservice* は次のディレクトリにインストールされています。

<Informatica installation directory>/tomcat/bin

デモンを停止するには次のコマンドを入力します。

*infaservice shutdown*

サポートされている環境に応じて、Windows のコントロールパネルまたは Administrator ツールから Informatica サービスを停止することもできます。

### ドメインのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、ドメインの設定メタデータをバックアップする必要があります。

ドメインをバックアップするには、次の手順を実行します。

- *infasetup BackupDomain* コマンドを実行して、ドメイン環境設定データベーステーブルをファイルにバックアップします。
- メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。



Informatica infasetup には、ドメインのバックアップとリストアを行うためのコマンドラインプログラムが含まれています。infasetup は、以下のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>/isp/bin

infasetup を使用してドメインをバックアップするには、以下の構文を使用します。

```
BackupDomain
<<-DatabaseAddress|-da> database_hostname:database_port|
<-DatabaseConnectionString|-cs> database_connection_string>
<-DatabaseUserName|-du> database_user_name
<-DatabasePassword|-dp> database_password
<-DatabaseType|-dt> database_type
[<-DatabaseServiceName|-ds> database_service_name]
<-BackupFile|-bf> backup_file_name
[<-Force|-f>]
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-Tablespace|-ts> tablespace_name (used for IBM DB2 only)]
[<-SchemaName|-sc> schema_name (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-DatabaseTlsEnabled|-dbtls> database_tls_enabled]
[<-DatabaseTruststorePassword|-dbtp> database_truststore_password]
[<-TrustedConnection|-tc> trusted_connection (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-EncryptionKeyLocation|-kl> encryption_key_location]
```

メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。以下の表は、メタデータファイルと、その場所を示します。

メタデータファイル	説明
nodemeta.xml	<p>ノードのメタデータが含まれます。</p> <p>ドメイン内の各ノード上の isp/config ディレクトリに格納されます。</p> <p>すべてのノードで同じバックアップディレクトリ名を使用する場合、バックアップ場所にコピーする前に nodemeta.xml の名前を変更します。</p> <p>たとえば、nodemeta.xml を、ノード A とノード B の /nodebak ディレクトリにバックアップするとします。ノード A の場合、ファイルが /nodebak/nodemeta_A.xml に、ノード B の場合、/nodebak/nodemeta_B.xml にバックアップされるように、コンフィギュレーションファイルの名前を変更します。</p>
domains.infa	<p>ゲートウェイノードの接続情報が含まれます。</p> <p>次のいずれかの場所に格納されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- クライアントおよびサーバーマシン上の Informatica インストールディレクトリ。</li> <li>- INFA_DOMAINS_FILE 環境変数で設定されている場所。</li> </ul>

## 第 7 章

# ドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica ドメインのアップグレード, 58 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 58 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 69 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 71 ページ](#)
- [ドメインアップグレードのトラブルシューティング, 74 ページ](#)

## Informatica ドメインのアップグレード

アップグレードウィザードは、以前のバージョンのファイルからドメイン情報を読み取り、同じ設定を使用してドメインとサーバーファイルを設定してアップグレードを行います。以前のバージョンと同じデータベースのドメイン環境設定リポジトリのテーブルがアップグレードされます。グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードでアップグレードできます。

アップグレードは、インストールファイルをダウンロードしたディレクトリから実行できます。

## グラフィカルモードでのアップグレード

Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。

管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。

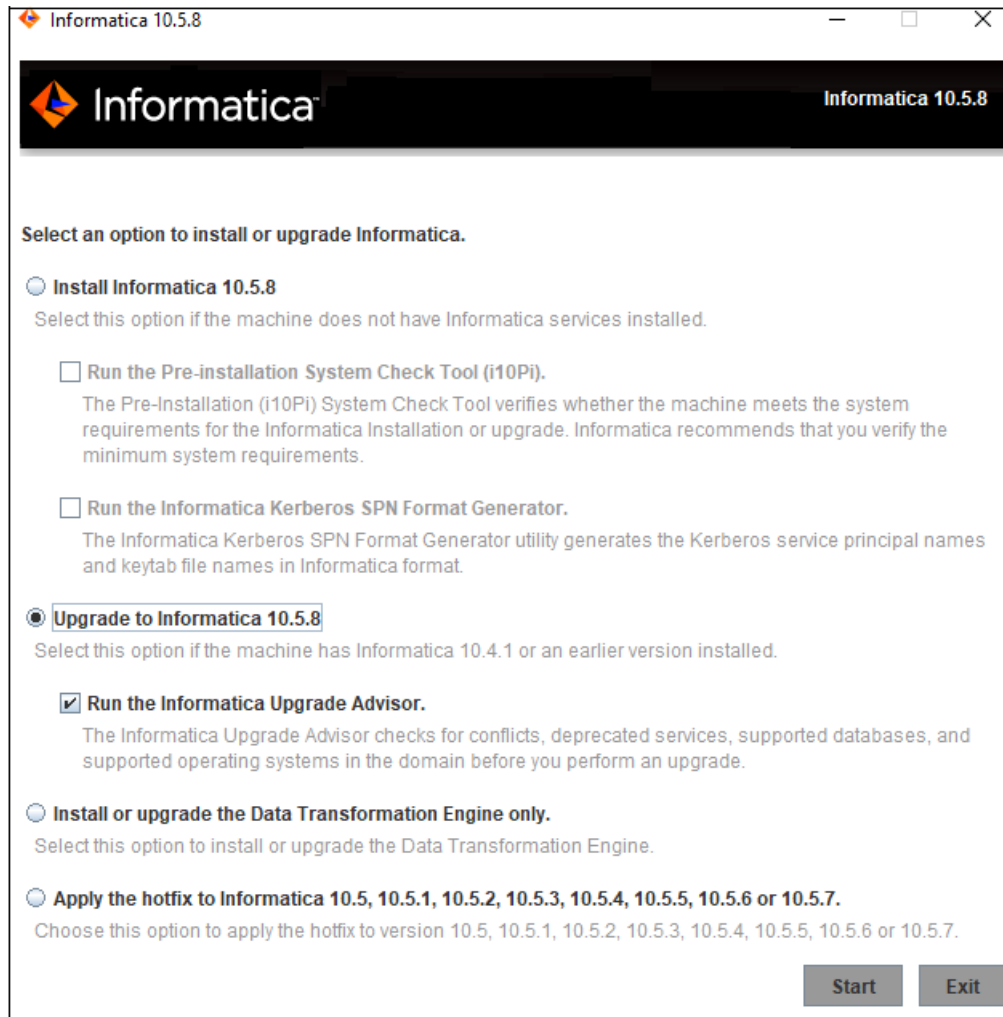
Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次の場所から install.exe を実行します。

```
<Informatica installation directory>/server/install.exe
```

**注:** **【管理者として実行】** を選択せずにインストーラを実行すると、Windows システム管理者が Informatica インストールディレクトリ内のファイルにアクセスできなくなることがあります。

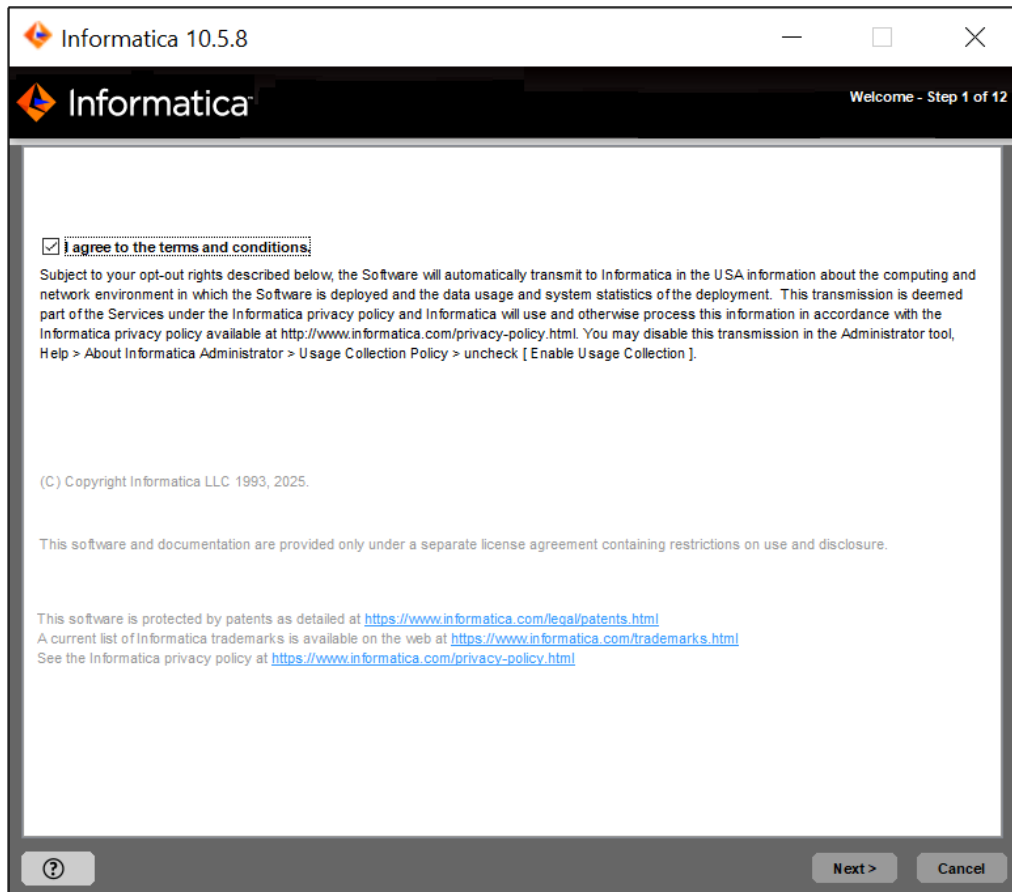
**Informatica 10.5.8** ページが表示されます。

4. **[Informatica 10.5.8 にアップグレード]** を選択します。



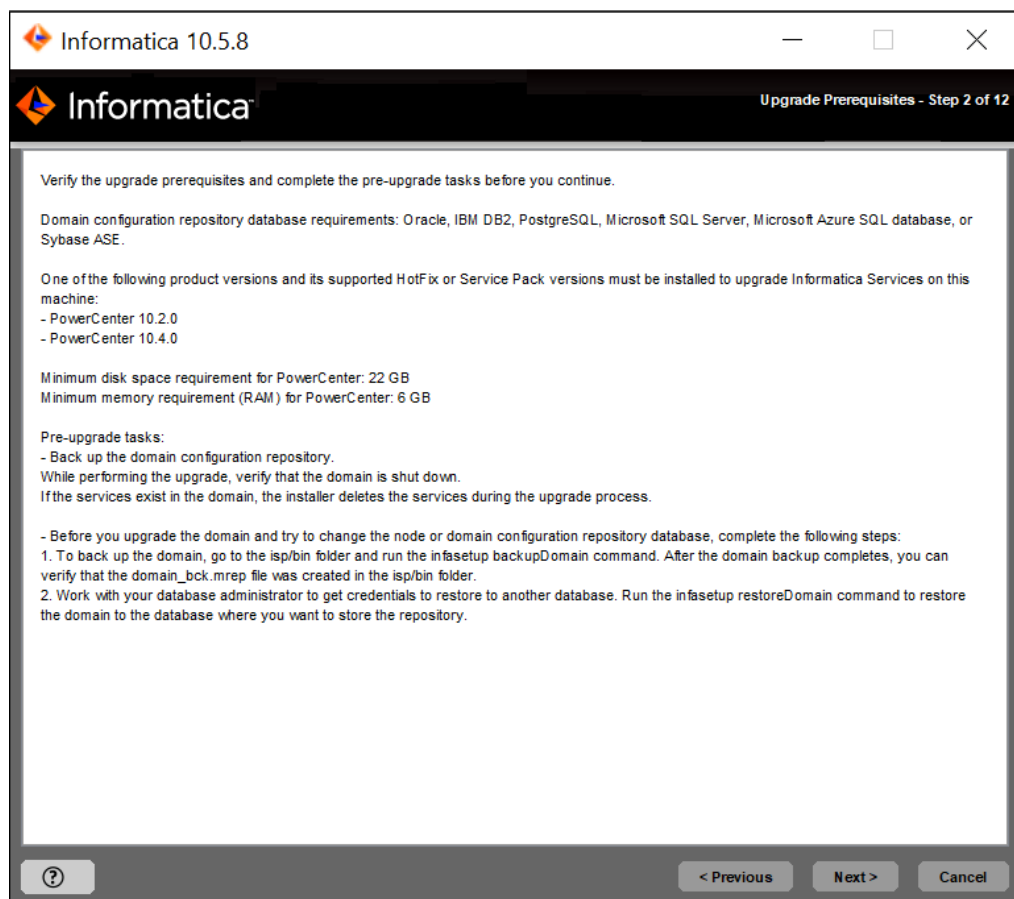
Informatica サービスのインストールプロセスを容易にするためのユーティリティを使用できます。アップグレード前に、Informatica Upgrade Advisor ユーティリティを実行する必要があります。Informatica Upgrade Advisor は、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメイン内にないか確認します。Informatica Upgrade Advisor の詳細については、[「Informatica Upgrade Advisor を実行します」 \(ページ 51\)](#)を参照してください。

5. **[開始]** をクリックします。
6. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **[契約条項に同意します]** を選択します。以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。



Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Administrator ツールから使用統計を無効にすることができます。

7. **【アップグレードの前提条件】** ページが表示されます。



アップグレードを続行する前に、要件を確認します。

8. [次へ] をクリックします。

[アップグレードディレクトリ] ページが表示されます。

9. アップグレードするバージョンの Informatica が含まれたディレクトリと、Informatica 10.5.8 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	<p>Informatica のインストール先ディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' "</p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

10. [ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] オプションが選択されていないことを確認します。
11. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。

12. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。
13. [次へ] をクリックします。  
[ドメインセキュリティ - 暗号化キー] ページが開かれます。

Informatica 10.5.8

Domain Security - Encryption Key - Step 3C of 12

Enter the encryption key information.

Encryption key directory: C:\Informatica\10.4.1\_server\_upgrade\isp\config\keys ... Default

Domain user name: Administrator

Domain password: [masked]

Confirm password: [masked]

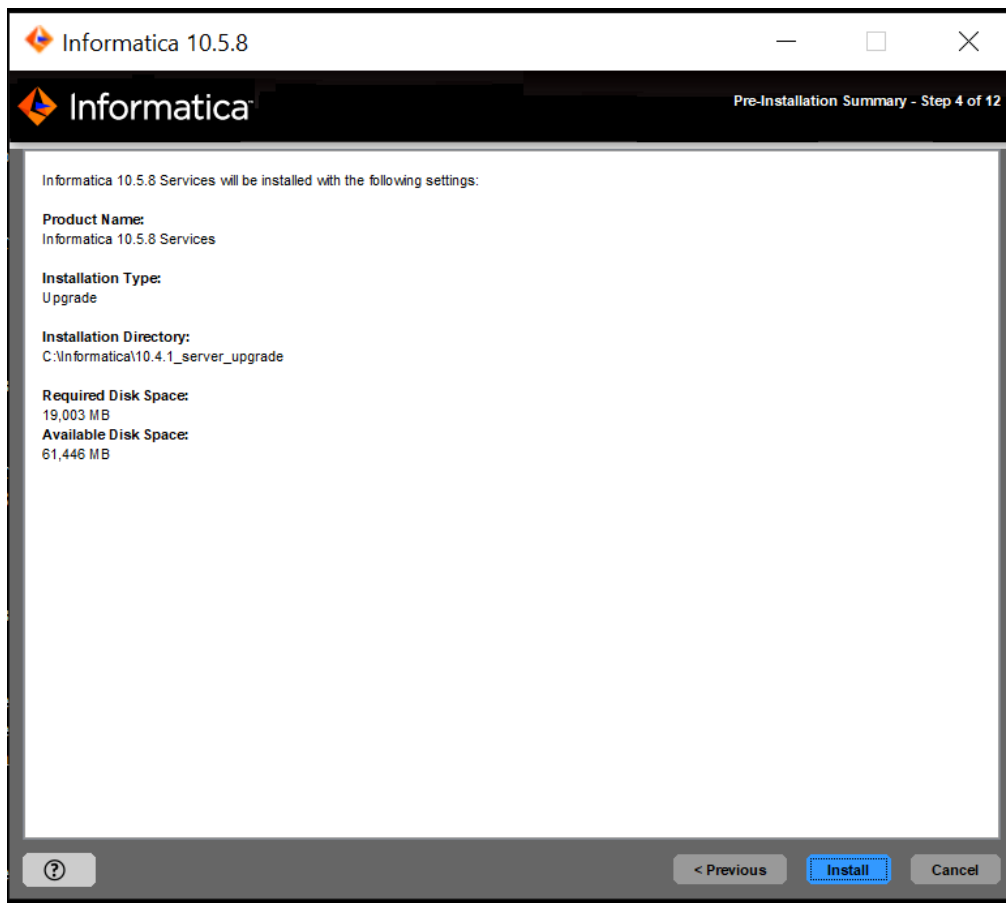
< Previous Next > Cancel

14. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。  
Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしようとしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。  
**注:** Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

15. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
16. [次へ] をクリックします。

[インストール前のサマリ] ページが表示されます。



17. アップグレード情報を確認し、[インストール] をクリックして続行します。

アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.5.8 のインストールディレクトリにインストールされます。

アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

18. [OK] をクリックします。



[ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード] ページが表示されます。

Informatica 10.5.8

Domain Configuration Repository Upgrade - Step 5A of 12

Enter database information for the domain configuration repository.

Database type:

Database user ID:

Database user password:

Database connection

☒ Enter the JDBC connection string.

ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、アップグレードされるドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリについて表示されるプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。

以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。

- 以前のバージョンがインストール時に JDBC URL を使用した場合は、データベースのアドレスとサービス名を含む JDBC 接続プロパティが表示されます。

必要に応じて、追加の JDBC パラメータを指定して JDBC URL に含めることができます。追加の JDBC パラメータを指定するには、JDBC パラメータを選択して、有効な JDBC パラメータ文字列を入力します。

- 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列が使用された場合は、カスタム接続文字列が表示されます。

追加の JDBC パラメータは指定できません。

19. **【テスト接続】** をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、**【OK】** をクリックして続行します。
20. **【ドメインおよびノードの構成】** ページで、ドメイン名、ノード名、ノードホスト名、およびノードのポート番号を入力します。HTTPS 設定にカスタムキーストアファイルを使用している場合は、カスタムキーストアのパスワードとキーストアファイルを入力します。

Informatica 10.5.8

Domain and Node Configuration - Step 8 of 12

Enter information for the Informatica domain.

Domain name:

Node name:

Node host name:

Node port number:

Enter the following custom keystore file information. Required if you use a custom keystore file for HTTPS configuration.

Custom keystore password:

Custom keystore file:

< Previous Next > Cancel

21. **【次へ】** をクリックします。  
**【ポート設定のアップグレード】** ページが表示されます。
22. **【ポート設定のアップグレード】** ページで、サービスマネージャおよび Administrator ツールの開始ポート番号とシャットダウンポート番号を入力します。

Informatica 10.5.8

Informatica Port Configuration Upgrade - Step 6A of 12

Enter the port numbers for the Service Manager and Informatica Administrator.

Service Manager port:	24006
Service Manager shutdown port:	24007
Informatica Administrator port:	24008
Informatica Administrator shutdown port:	24009

Default

? < Previous Next > Cancel

23. 【次へ】をクリックします。

[Windows サービスの設定] ページが表示されます。

Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザーアカウントで実行されます。別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行できます。

24. 別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行することを選択します。  
次のユーザーアカウント情報を入力します。

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <domain name>\<user account> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能] 権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

25. [次へ] をクリックします。  
[インストール後のサマリ] ページが表示されます。

26. **【完了】** をクリックすると、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

## コンソールモードでのアップグレード

UNIX または Linux では、コンソールモードでアップグレードを実行できます。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit、Back および Help という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使用しないでください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. シェルコマンドラインで、インストールファイルを実行します。  
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。  
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするために、**[2]** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。  
Informatica では、Informatica サービスのインストールプロセスを容易にするためのユーティリティを用意しています。このユーティリティは、Informatica サービスをアップグレードする前に実行します。Informatica Upgrade Advisor を使用することで、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービスを確認することができます。  
アップグレードを続行する前に、アップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
7. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **[2]** を押してアップグレードを続行します。  
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデPLOYされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、  
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。
8. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。  
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
9. アップグレード情報を確認し、**[Enter]** キーを押して続行します。  
**【アップグレードディレクトリ】** パネルが表示されます。
10. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリ、および Informatica 10.5.8 にアップグレードするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要のあるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.5.8 のディレクトリ	Informatica 10.5.8 のインストール先ディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' <b>注:</b> á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

11. 次のインストールオプションから、要件に基づいてアップグレード環境を選択します。
  - サンドボックス。概念の証明用、または最小限のユーザーによるサンドボックスとして使用します。
  - 開発環境。設計環境用に使用します。
  - テスト。本番環境に近い大規模な処理環境用に使用します。
  - 本番環境。エンドユーザー向けの大規模な処理と高レベルの同時実行性を備えた本番環境で使用します。
12. ノードのホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリを変更するかどうかを選択します。以前のバージョンと同じノード設定を使用するには、**[1]** キーを押します。ノード設定を変更するには、**[2]** キーを押します。  
**[コンポーネントの選択]** パネルが表示されます。
13. Informatica サービスをアップグレードするには、**[1]** キーを押します。
14. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを選択します。
  - ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、**1** を押します。
  - インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、**2** を押します。
 デフォルトは 1 です。
15. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。  
デフォルトは 1 です。
16. **Enter** キーを押します。  
**[ドメインセキュリティ - 暗号化キー]** パネルが表示されます。
17. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。  
Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしようとしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。  
**注:** Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメ

インの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは次のディレクトリに作成されます: <Informatica installation directory>/isp/config/keys

18. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。  
[インストール前のサマリ] ページが表示されます。
19. アップグレード情報を確認し、**Enter** キーを押して続行します。  
ドメインのアップグレードが完了すると、[ドメイン設定リポジトリ] パネルが表示されます。
20. **Enter** キーを押してアップグレードを続行します。  
インストーラによって、サーバーファイルが Informatica 10.5.8 のインストールディレクトリにコピーされます。  
アップグレードするドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。
  - 以前のバージョンでインストール時に JDBC URL を使用していた場合は、インストーラでデータベースアドレスを含む JDBC 接続プロパティが表示されます。
  - 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列を使用していた場合は、インストーラでカスタム接続文字列が表示されます。
21. JDBC URL を使用する場合は、追加のパラメータを指定して接続文字列に含めることができます。  
カスタム接続文字列を使用する場合は、追加のパラメータを指定できません。
22. 情報を確認して、**Enter** キーを押します。  
アップグレードが完了し、[インストール後のサマリ] パネルが表示されます。
23. [**Enter**] キーを押すとインストール手順が完了し、インストーラが終了します。  
アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

## サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでは、ユーザーが操作することなくアップグレードを実行できます。

サイレントモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica ドメインサービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

## プロパティファイル内のパスワードの暗号化

インストーラをサイレントモードで実行するときにオプションの指定に使用するプロパティファイルで設定するパスワードを暗号化できるユーティリティが、インストーラには含まれています。Informatica では、複数の 256 ビットキーを含む AES 暗号化を使用してパスワードを暗号化します。

ユーティリティは、暗号化するパスワードごとに実行します。ユーティリティを実行するときは、パスワードの値をコマンドプロンプトでプレーンテキストで指定します。ユーティリティは、暗号化された形式のパスワードを出力として生成します。出力には次のプレフィックスが含まれます。=INSTALLER:CIPHER:AES:256=

プレフィックスを含む完全な出力文字列をコピーして、パスワードプロパティの値としてプロパティファイル内に貼り付けます。インストーラをサイレントモードで実行すると、インストールフレームワークによってパスワードが復号化されます。

1. 以下のユーティリティのディレクトリに移動します。

<Installer directory>/properties/utils/passwd\_encryption

2. ユーティリティを実行します。<password>の値として暗号化するプレーンテキストのパスワードを指定します。

- Linux および UNIX では、次のコマンドを実行します。

```
sh install.sh <password>
```

- Windows では、次のコマンドを実行します。

```
install.bat <password>
```

3. 暗号化されたパスワード文字列を出力からコピーして、対応するパスワードの値として.properties ファイルに貼り付けます。

次の例は、DOMAIN\_PSSWD プロパティの値として設定された、暗号化されたパスワードを示しています。

```
DOMAIN_PSSWD==INSTALLER:CIPHER:AES:256=mjkjmDR2kzFJiizfRWIOPg==
```

## プロパティファイルの作成

Informatica には、2 つのバージョンのプロパティファイルがあります。いずれかのファイルを使用して、インストールのオプションを指定します。

### サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイル

ノード設定を変更し、ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルを使用します。

サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルには、Informatica ドメインサービスをサイレントモードでアップグレードするために必要な設定プロパティが含まれています。ファイルの各プロパティに設定する適切な値を検討する場合はこのファイルを使用します。

### デフォルトサイレント入力アップグレードプロパティファイル

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレードプロパティファイルを使用します。



デフォルトのサイレント入力プロパティファイルには、多数の設定プロパティ用のデフォルト値が含まれます。デフォルトのプロパティ値を使用して Informatica ドメインサービスをアップグレードする場合は、このファイルを使用します。

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのアップグレードプロパティファイルは `SilentInput_upgrade.properties` という名前で、インストーラのダウンロード場所にあります。ファイルをカスタマイズした後、`SilentInput.properties` というファイル名で保存します。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. `SilentInput_upgrade.properties` という名前のファイルを検索します。  
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

次の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica をインストールするか、アップグレードするかを指定します。 値が 0 の場合、インストーラは Informatica の新規インストールを実行します。値が 1 の場合、インストーラは以前のバージョンの Informatica をアップグレードします。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica サービスをインストールするディレクトリ。以前のバージョンの Informatica サービスが存在するディレクトリと同じディレクトリは使用できません。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica サービスの以前のバージョンを含むディレクトリ。
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を <code>true</code> に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を <code>false</code> に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。
KEY_DEST_LOCATION	このインストールで作成されたノードの暗号化キーを格納するディレクトリ。
DOMAIN_USER	Informatica ドメインのユーザー名。

プロパティ名	説明
DOMAIN_PSSWD	Informatica ドメインのパスワード。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	Informatica DiscoveryIQ を有効にします。これは、データの状況とシステムの統計値に関するレポートを定期的に Informatica に送信する製品使用状況ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Informatica に使用統計を送信しないように選択することもできます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『 <i>Informatica Administrator ガイド</i> 』を参照してください。 アップグレードするには、値を 1 に設定する必要があります。

4. プロパティファイルを「SilentInput.properties」という名前で保存します。

## サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。

Windows で、管理者としてコマンドプロンプトを開きます。管理者としてコマンドプロンプトを開かないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

2. サーバーインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む SilentInput.properties ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントインストール実行可能ファイルを実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Informatica\_<Version>\_Services\_InstallLog<timestamp>.log がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、サイレントアップグレードログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。サイレントアップグレードログファイルの名前は silentErrorLog.log です。

このインストーラは、Windows ではルートディレクトリに、UNIX ではユーザーホームディレクトリにログファイルを作成します。

## ドメインアップグレードのトラブルシューティング

ドメインのアップグレード中またはアップグレード後に問題が発生した場合は、次のトラブルシューティングのヒントを考慮してください。

### ドメインのアップグレードが失敗します。

アップグレードが正常に完了しない場合は、ログファイルを調べて障害の原因を特定します。アップグレードログファイルは、新しいバージョンの Informatica がインストールされているディレクトリのルートにあります。次のログファイルを確認します。Informatica\_<Version>\_Services\_Upgrade.log

アップグレードが続けて失敗する場合、バックアップからドメイン環境設定リポジトリデータベースをリストアし、インストーラを再度実行します。

#### Administrator ツールにアクセスすると、404 エラーメッセージが表示されます。

安全な通信のために Administrator ツールが設定されている場合、Administrator ツールにアクセスしたときに、404 Not Found メッセージが表示される場合があります。この問題は、ゲートウェイノードを実行しているマシンが、Administrator ツールへの HTTPS 接続に使用されているキーストアファイルにアクセスできない場合に発生します。キーストアファイルをアクセス可能な場所にコピーしてから、ドメインをシャットダウンします。infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

#### アップグレード中またはアップグレード後にドメインがクラッシュします。

アップグレード中またはアップグレード後にドメインがクラッシュする場合は、ドメインのバックアップから siteKey ファイルを復元するか、ドメインの前のバージョンで siteKey を生成した時に指定したものと同一キーワードとドメイン名を使用して暗号化キーを生成します。

#### マルチノード設定では、マスターノードとは異なるサイトキーを使用するとエラーが発生する可能性があります。

マルチノード設定の場合に、別のサイトキーを使用すると、次のエラーが発生する可能性があります。

```
021-03-03 12:51:44,795 FATAL [Domain Monitor] [DOM_10061] Cannot register node [newISPNode1]
with the domain because the master gateway node is not running or is not connected to the
domain. Verify that all gateway nodes are running on the domain.
```

```
com.informatica.isp.corecommon.exceptions.ISPException: [CCM_10342] The following exception
occurred: [[FrameworkUtils_0018] The encryption key for the node is different from the
encryption for the domain. All the nodes in a domain must use the same encryption key. To
change the encryption key for the domain, run the infasetup migrateEncryptionKey command on
all nodes in the domain.].)
```

この問題を解決するには、マスタノードと同じサイトキーを使用していることを確認します。

## 第 8 章

# ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要, 76 ページ](#)
- [別のデータベースへの移行, 77 ページ](#)
- [別のマシンへのインストールの移行, 77 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 83 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 95 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 102 ページ](#)
- [ノード設定の変更の完了, 102 ページ](#)

## ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードを行う前に、アップグレードの準備として以下の手順を実行する必要があります。ノード設定にどのような変更を行うかによって、実行する手順は異なります。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行できます。または、Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行できます。

ドメインをアップグレードする場合は、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定を変更できます。

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいマシンのノードを設定するようにノード設定を変更します。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいデータベースを設定するようにノード設定を変更します。

インストーラを実行する前にアップグレード前のタスクを完了します。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

Windows では、グラフィカルモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。UNIX または Linux では、コンソールモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。

## 別のデータベースへの移行

ドメイン環境設定リポジトリのデータベースのタイプまたはバージョンのサポートが終了した場合は、リポジトリを別のサポートされるデータベースに移行する必要があります。ドメインをアップグレードする前に、以前の Informatica インスタンスのリポジトリを移行します。

**注:** ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります、それらの不具合は無視できます。

別のデータベースに移行する場合は、Informatica インストーラにある i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプまたは新しいバージョンのインストールサポートをテストします。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

1. ドメインをシャットダウンします。
2. infasetup BackupDomain コマンドを使用して、ドメイン環境設定データベーステーブルがファイルにバックアップされていることを確認します。
3. データベーススキーマとユーザーアカウントをサポートされるデータベース中に作成します。
4. 別のデータベースでサポートされているインストールをテストするために作成したデータベースユーザーアカウントを使用して、Informatica インストーラにある i10Pi を実行します。このデータベースユーザーが、アップグレード後のバージョンでサポート対象であると i10pi に表示されることを確認します。
5. infasetup RestoreDomain コマンドを使用して、バックアップファイル中のドメイン環境設定を指定したデータベーススキーマにリストアします。
6. アップグレードインストーラを実行します。
7. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいドメイン環境設定リポジトリデータベースに接続するようにゲートウェイノードを設定できます。すべてのゲートウェイノードには、ドメイン環境設定を取得および更新するためのドメイン環境設定リポジトリへの接続が必要です。作業ノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

## 別のマシンへのインストールの移行

サポートが終了しているオペレーティングシステムのマシンに Informatica サービスがインストールされている場合、ドメインをアップグレードする前に、別のマシンにそのインストールを移行する必要があります。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

ドメインをアップグレードする前に、新しいバージョンの Informatica を実行するマシン上で、次の手順を実行します。

1. Informatica インストーラから実行可能な i10Pi を使用して、新しいマシンのインストールサポートをテストします。
2. 以前のマシンから新しいマシンへ、すべてのインストールバイナリを含むインストールディレクトリをコピーします。
3. ポート要件を確認します。

4. システムユーザーアカウントを作成します。
5. データベースへのアクセスを必要とするすべてのサービスのネイティブ接続を構成します。
6. サポートされる新しいマシンでアップグレードインストーラを実行します。

移行したノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいマシンのノードの設定を更新できます。別のマシンに移行しなかったドメイン内の他のノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

## 手順 1. インストールディレクトリのコピー

以前のバージョンの Informatica のディレクトリを、新しいバージョンの Informatica を実行するマシンにコピーします。

例えば、以前のバージョンの Informatica が `C:\Informatica\<version>` にインストールされている場合、`C:\Informatica\<version>` ディレクトリとサブディレクトリを新しいマシンにコピーします。

アップグレードインストーラを実行するとき、新しいマシン上の Informatica インストールディレクトリを、アップグレード対象のディレクトリとして指定します。

## 手順 2. ポート要件の確認

インストーラによって Informatica ドメイン内のコンポーネントのポートが設定され、一部のアプリケーションサービスに使用する動的ポートの範囲が指定されます。

コンポーネントに使用するポート番号と、アプリケーションサービスに使用する動的ポート番号の範囲を指定することができます。あるいは、インストーラによって提供されるデフォルトのポート番号を使用することができます。ポート番号が Informatica サービスをインストールするマシンで利用可能かどうかを確認します。

以下の表に、設定できるポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。サービスマネージャは、このポートで受信する接続要求をリスンします。クライアントアプリケーションは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。 Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用して、ドメインと通信します。このポートは、SQL データサービスの JDBC/ODBC ドライバ用のポートでもあります。デフォルトは 6006 です。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6007 です。
Informatica Administrator ポート	Informatica Administrator が使用するポート番号。デフォルトは 6008 です。
Informatica Administrator HTTPS ポート	デフォルトポートはありません。サービスの作成時に必要なポート番号を入力します。このポートを 0 に設定すると、管理者ツールへの HTTPS 接続が無効になります。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Informatica Administrator のサーバーシャットダウンを制御するポート番号。Informatica Administrator は、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6009 です。

ポート	説明
最小ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最小ポート番号。デフォルトは 6014 です。
最大ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最大ポート番号。デフォルトは 6114 です。

**注:** ポートの競合がある場合、サービスおよびノードは起動に失敗する場合があります。アップグレード後に、アプリケーションサービスのポートの範囲を更新することができます。

## 手順 3。システムユーザーアカウントの作成

システムユーザーアカウントは、Windows または UNIX で作成できます。

### Windows の場合:

システムユーザーアカウントを作成し、インストールを行ってから Informatica サービスを実行します。Informatica サービスのインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

マシンにログインしたユーザーアカウントを使用して Informatica をインストールし、別のユーザーアカウントで実行することができます。ローカルアカウントまたはドメインアカウントを作成して、Informatica をインストールするか、または Informatica Windows サービスを実行することができます。

**注:** Windows の信頼関係接続を使用する Microsoft SQL Server 上のリポジトリにアクセスするには、ドメインアカウントを作成します。

ユーザーアカウントは、インストーラを実行するための、または Informatica Windows サービスを実行するための以下の権限が必要になります。

- **ログインユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインします。
- **別のユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン、およびオペレーティングシステムの一部として機能の権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインする必要はありません。インストール中に、Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントを指定することができます。

### UNIX の場合:

Informatica のインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

## 手順 4。サービスマシンへのネイティブ接続の設定

アプリケーションサービスとデータベース間にネイティブ接続を確立するには、アクセスするデータベースのデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

ネイティブドライバは、データベースサーバーおよびクライアントソフトウェアにパッケージ化されています。データベースにアクセスする必要があるマシンに接続を設定します。アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確認するには、データベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールし、適切なデータベースクライアントライブラリを使用します。



データ統合サービスは、ネイティブデータベースドライバを使って次のデータベースに接続します。

- ソースデータベースとターゲットデータベース。ソースデータベースからデータを読み取って、ターゲットデータベースに書き込みます。
- データオブジェクトキャッシュデータベース。データオブジェクトキャッシュを保存します。
- Profiling ソースデータベース。リレーショナルソースデータベースから読み取って、プロファイルソースに対して実行します。
- プロファイリングウェアハウス。プロファイリング結果をプロファイリングウェアハウスに書き込みます。
- 参照テーブル。マッピングを実行して、参照テーブルと外部データソース間でデータを転送します。

データ統合サービスが単一のノードまたはプライマリノードやバックアップノードで実行されている場合は、データ統合サービスが実行されるマシンにデータベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

データ統合サービスがグリッドで実行されている場合は、計算ロールを持つノードまたはサービスロールと計算ロールの両方を持つノードの各マシンに、データベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

## 手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、所定のマシンにデータベースクライアントをインストールする必要があります。

アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確保するには、適切なデータベースクライアントライブラリを使用して、そのデータベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールします。

Informatica サービスをアップグレードするときは、データ統合サービスを実行するマシンに適切なデータベースクライアントをインストールしてください。

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、次のデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

### IBM DB2 Client Application Enabler (CAE)

所定のマシンに Informatica サービスを起動するユーザーとして接続し、そのマシンの接続を設定します。

### Microsoft SQL Server 2014 Native Client

既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2014 Native Client をインストールする必要があります。

次の Microsoft の Web サイトからクライアントをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/en-in/download/details.aspx?id=42295>.

### Oracle クライアント

互換性のあるバージョンの Oracle クライアントと Oracle データベースサーバをインストールします。また、必要とするすべてのマシンに Oracle クライアントの同じバージョンをインストールする必要があります。互換性を確認するには、Oracle に問い合わせてください。

### Sybase Open Client (OCS)

Sybase ASE データベースサーバと互換性のあるバージョンの Open Client をインストールします。また、Sybase ASE データベースおよび Informatica をホストするマシンに同じバージョンの Open Client をインストールする必要があります。互換性を確認するには、Sybase に問い合わせてください。



## 手順 6.データベースクライアントの環境変数の設定

データ統合サービスプロセスが実行されるマシンで、データベースクライアントの環境変数を設定します。

データベース環境変数の設定後、データベースとデータベースクライアント間の接続をテストできます。

次の表に、UNIX に設定する必要があるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
Oracle	ORACLE_HOME PATH[PATH]	sqlplus	設定: <DatabasePath> 追加: <DatabasePath>/bin
IBM DB2	DB2DIR DB2INSTANCE PATH[PATH]	db2connect	設定: <DatabasePath> 設定: <DB2InstanceName> 追加: <DatabasePath>/bin
Sybase ASE	SYBASE15 SYBASE_ASE SYBASE_OCS PATH[PATH]	isql	設定: <DatabasePath>/sybase<version> 設定: \${SYBASE15}/ASE-<version> 設定: \${SYBASE15}/OCS-<version> 追加: \${SYBASE_ASE}/bin:\${SYBASE_OCS}/ bin:\$PATH

## 手順 6.UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定

PowerCenter 統合サービス PowerCenter Integration Service プロセスを実行するマシンでデータベースクライアント環境変数を設定します。

データベース環境変数の設定後、データベースとデータベースクライアント間の接続をテストできます。

次の表に、UNIX に設定する必要があるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
Oracle	ORACLE_HOME PATH[PATH] LD_LIBRARY_PATH TNS_ADMIN INFA_TRUSTSTORE	sqlplus	<p>設定: <i>&lt;Client InstallDatabasePath&gt;</i>  追加: <i>&lt;DatabasePath&gt;/bin</i> および  <i>USER_INSTALL_DIR/server/bin:\$PATH</i>  設定: <i>\$ORACLE_HOME/lib</i> および <i>USER_INSTALL_DIR/server/bin:\$LD_LIBRARY_PATH</i>  tnsnames.ora ファイルの場所に設定:  <i>\$ORACLE_HOME/network/admin</i>  デフォルトの SSL ドメインの場合、追加:  <i>USER_INSTALL_DIR/services/shared/security</i>  カスタムの SSL ドメインの場合、  <i>INFA_TRUSTSTORE</i> および  <i>INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD</i> を設定  プライベートトラストストアファイルを設定するには、証明書を手動でインポートする必要があります。<i>&lt;INFA_JDK_HOME&gt;</i>ディレクトリで <i>keytool</i> コマンドを実行し、プライベートトラストストア証明書をインポートします。たとえば、次の <i>keytool</i> コマンドを使用します。</p> <pre>keytool -noprompt -importkeystore -srckeystore &lt;source truststore file path&gt; -srcstorepass &lt;source truststore file password&gt; -srcalias &lt;alias&gt; -srcstoretype JKS -destkeystore &lt;destination truststore file path&gt; -deststorepass &lt;destination truststore file password&gt; -keypass &lt;private key password&gt; -deststoretype JKS</pre>
SQL Server	ODBCHOME ODBCINI ODBCINST PATH LD_LIBRARY_PATH INFA_TRUSTSTORE		<p>設定: <i>USER_INSTALL_DIR/ODBC7.1</i>  設定: <i>\$ODBCHOME/odbc.ini</i>  設定: <i>\$ODBCHOME/odbcinst.ini</i>  追加: <i>/opt/mssql-tools/bin:\$PATH</i>  <i>\$PATHUSER_INSTALL_DIR/</i>  <i>ODBC7.1:\$PATHUSER_INSTALL_DIR/server/</i>  <i>bin:\$PATH</i>  追加: <i>\$ODBCHOME/lib</i>  <i>USER_INSTALL_DIR/server/</i>  <i>bin:\$LD_LIBRARY_PATH</i>  デフォルトの SSL ドメインの場合、追加:  <i>USER_INSTALL_DIR/services/shared/security</i>  カスタムの SSL ドメインの場合、  <i>INFA_TRUSTSTORE</i> および  <i>INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD</i> を設定  プライベートトラストストアファイルを設定するには、証明書を手動でインポートする必要があります。<i>&lt;INFA_JDK_HOME&gt;</i>ディレクトリで <i>keytool</i> コマンドを実行し、プライベートトラストストア証明書をインポートします。たとえば、次の <i>keytool</i> コマンドを使用します。</p> <pre>keytool -noprompt -importkeystore -srckeystore &lt;source truststore file path&gt; -srcstorepass &lt;source truststore file password&gt; -srcalias &lt;alias&gt; -srcstoretype JKS -destkeystore</pre>

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
			<destination truststore file path> -deststorepass <destination truststore file password> -keypass <private key password> -deststoretype JKS

## グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。  
管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。

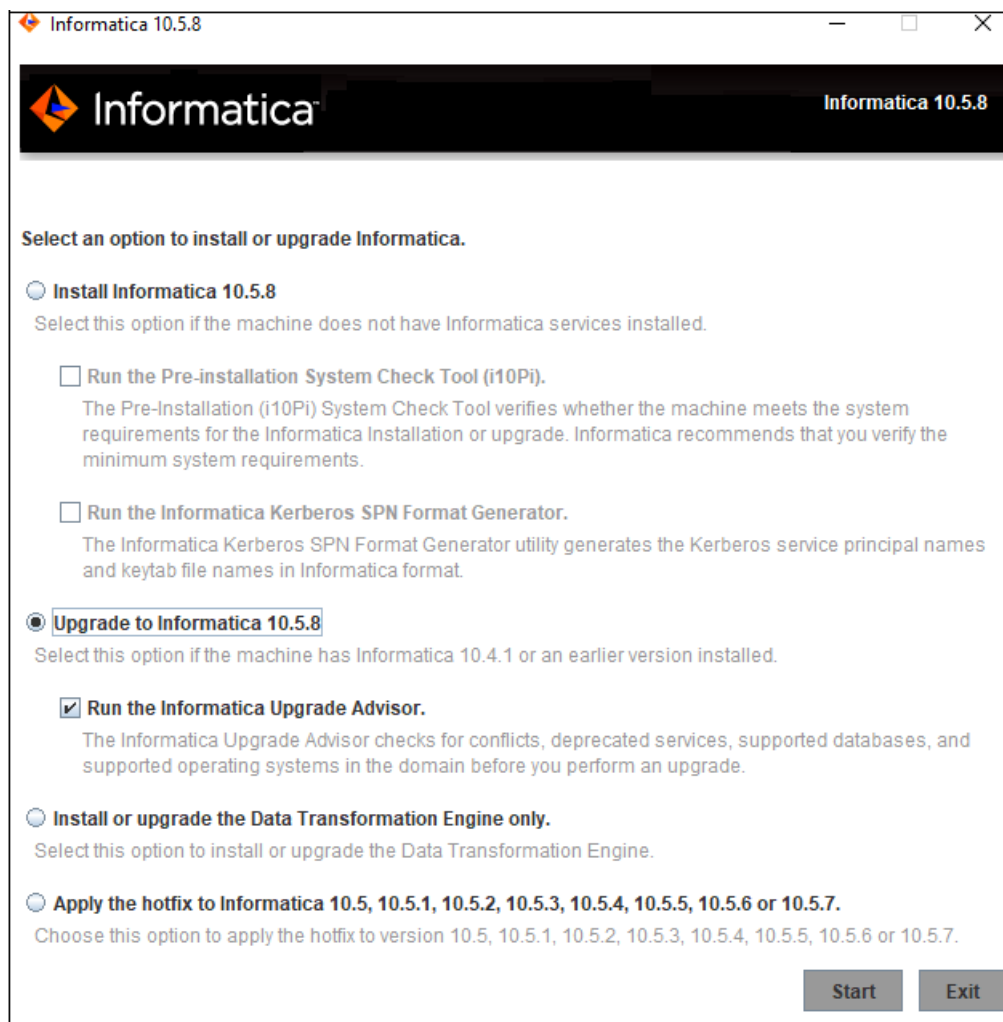
Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次の場所から install.exe を実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

**注:** **【管理者として実行】** を選択せずにインストーラを実行すると、Windows システム管理者が Informatica インストールディレクトリ内のファイルにアクセスできなくなることがあります。

**Informatica 10.5.8** ページが表示されます。

4. **【Informatica 10.5.8 にアップグレード】** を選択します。



Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

#### インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。

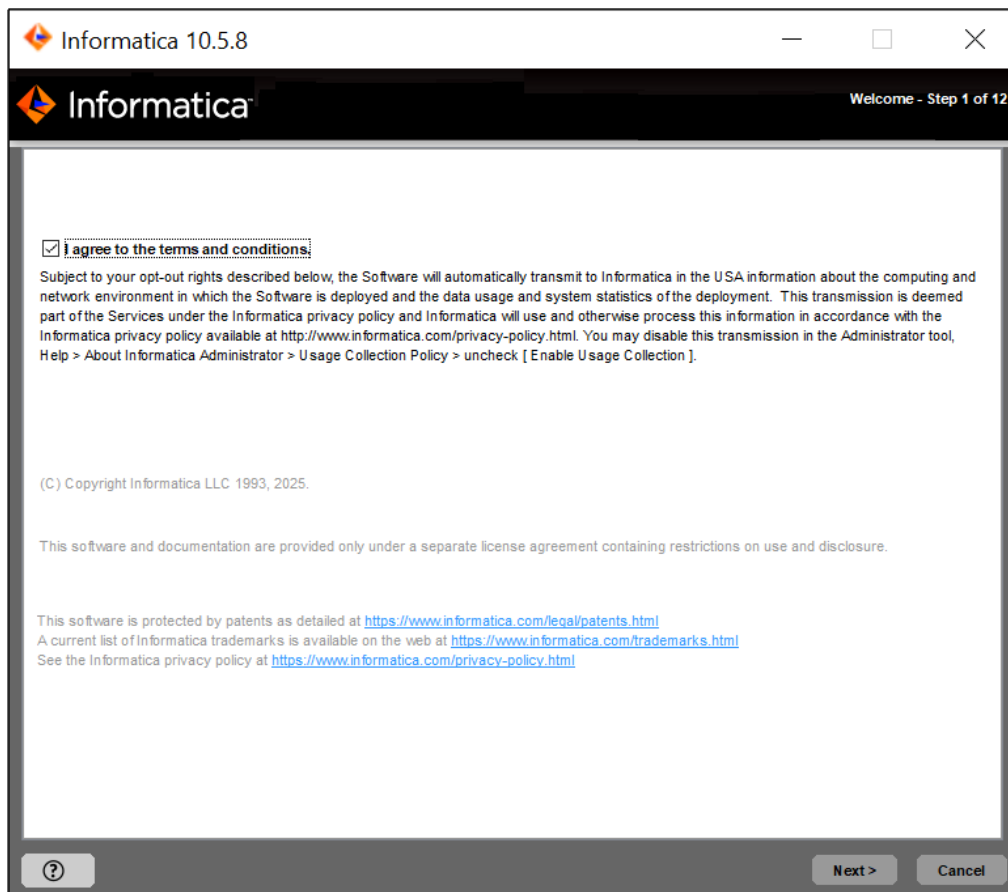
#### Informatica Upgrade Advisor。

アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。

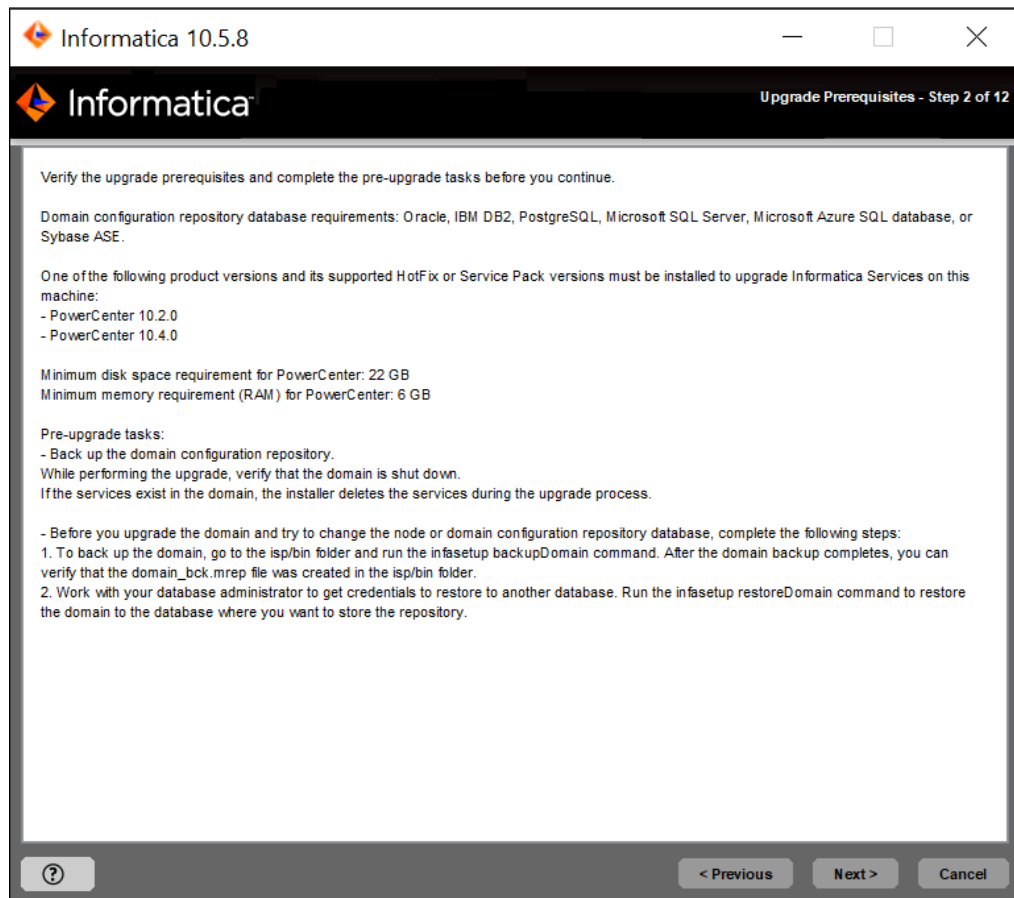
5. **【開始】** をクリックします。

6. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **【契約条項に同意します】** を選択します。

以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。



7. 【アップグレードの前提条件】ページが表示されます。



アップグレードを続行する前に、要件を確認します。

8. [次へ] をクリックします。

[アップグレードディレクトリ] ページが表示されます。

- アップグレードするバージョンの Informatica が含まれたディレクトリと、Informatica 10.5.8 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	<p>Informatica のインストール先ディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' "</p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

- [ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] を選択します。

アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。

11. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。
12. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。
13. **[次へ]** をクリックします。

**[ドメインセキュリティ - 暗号化キー]** ページが開かれます。

14. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

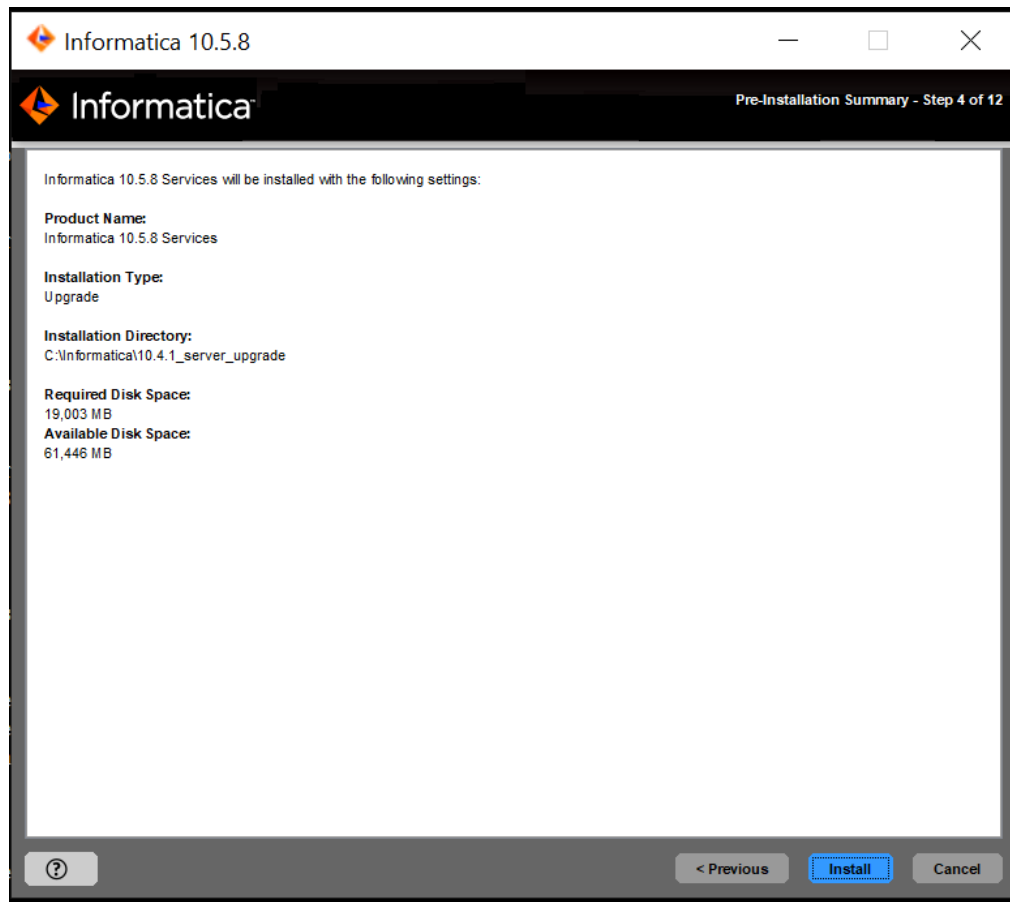
Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

**注:** Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

15. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
16. **[次へ]** をクリックします。





[インストール前のサマリ] ページが表示されます。

17. アップグレード情報を確認し、[インストール] をクリックして続行します。  
アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.5.8 のインストールディレクトリにインストールされます。  
アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
18. [OK] をクリックします。
19. ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、[ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード] ページにドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウント情報を入力します。

Informatica 10.5.8

Domain Configuration Repository Upgrade - Step 5A of 12

Enter database information for the domain configuration repository.

Database type:

Database user ID:

Database user password:

Database connection

☒ Enter the JDBC connection string.

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [21 \(ページ 92\)](#)に進みます。

次のデータベースおよびユーザーアカウントを入力します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server、PostgreSQL、または Sybase ASE を選択します。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
テーブルスペース	<p>IBM DB2 で使用できます。テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。</p> <p>単一パーティションのデータベースでは、このオプションが選択されていない場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。</p> <p>複数パーティションのデータベースでは、このオプションを選択し、データベースのカatalogパーティション内に存在するパーティション化されていないテーブルスペースの名前を指定します。</p>

プロパティ	説明
スキーマ名	Microsoft SQL Server および PostgreSQL で使用できます。ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。選択されていない場合、インストーラはデフォルトのスキーマでテーブルを作成します。
信頼関係接続	Microsoft SQL Server で使用できます。信頼関係接続を使用して Microsoft SQL Server に接続するかどうかを示します。信頼認証は、現在のユーザーのセキュリティ資格情報を使用して Microsoft SQL Server へ接続します。選択されていない場合、インストーラは Microsoft SQL Server 認証を使用します。

20. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、**[JDBC URL]** を選択し、JDBC の URL のプロパティを指定します。  
次の表で、指定する必要がある JDBC URL プロパティについて説明します。

プロパティ	説明
データベースアドレス	host_name:port フォーマットのデータベースのホスト名とポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: <ul style="list-style-type: none"> <li>- Oracle: サービス名を入力します。</li> <li>- Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。</li> <li>- IBM DB2: サービス名を入力します。</li> <li>- Sybase ASE: データベース名を入力します。</li> <li>- PostgreSQL: データベース名を入力します。</li> </ul>
JDBC パラメータ	データベース接続文字列に含めるオプションのパラメータです。パラメータを使用して、データベースのデータベース操作を最適化します。パラメータ文字列が有効であることを確認してください。インストーラは、JDBC URL に文字列を追加する前にパラメータ文字列を検証しません。選択されていない場合、インストーラは追加パラメータなしで JDBC URL 文字列を作成します。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、**[カスタム JDBC 接続文字列]** を選択して接続文字列を入力します。

JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Oracle database through Oracle Connection Manager を介して Oracle データベースに接続するには、次の接続文字列を使用します。

```
jdbc:Informatica:oracle:TNSNamesFile=<fully qualified path to the tnsnames.ora file>;TNSServerName=<TNS name>;
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

#### Windows NT 資格情報を使用する Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server でのモデルリポジトリデータベースの Windows NT 資格情報を指定した場合は、接続文字列構文を指定して、認証方法を NTLM として含めます。

Windows NT 資格情報を持つデフォルトインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Windows NT 資格情報を持つ名前付きインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>\<named instance name>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

#### Microsoft Azure SQL

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;EncryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=false
```

#### Active Directory 認証を使用する Azure SQL Database

```
jdbc:informatica: sqlserver://  
<host_name>:<port_number>;database=<database_name>;encrypt=true;AuthenticationMethod=ActiveDirectoryPassword;trustServerCertificate=false;hostNameInCertificate=*.database.windows.net;loginTimeout=<seconds>
```

#### PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

#### Azure PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;EncryptionMethod=SSL;ValidateServerCertificate=true;CryptoProtocolVersion=TLSv1.2;
```

#### Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

21. **【テスト接続】** をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、**【OK】** をクリックして続行します。
22. **【次へ】** をクリックします。  
**【ドメインおよびノードの設定】** ページが表示されます。
23. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。

以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	新しいバージョンの Informatica のノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

24. カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルのパスワードと場所を入力します。

次の表に、Informatica Administrator カスタムキーストアのプロパティを示します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\

25. **【次へ】** をクリックします。

**【ポート設定のアップグレード】** ページが表示されます。

26. 新しいポート番号を入力するか、またはデフォルトのポート番号を使用します。

以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

27. [次へ] をクリックします。

[Windows サービスの設定] ページが表示されます。

Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザーアカウントで実行されます。別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行できます。

28. 別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを選択します。

次のユーザーアカウント情報を入力します。

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <domain name>\<user account> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能]権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

29. **【次へ】** をクリックします。

**【インストール後のサマリ】** ページが表示されます。

30. **【完了】** をクリックすると、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

## コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Linux または UNIX では、ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使わないでください。

1. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。

ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。

2. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。

環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。

3. Informatica をアップグレードするために、**2** キーを押します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

Informatica Upgrade Advisor。

アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。

アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

4. **Informatica 10.5.3** にアップグレードするには、Informatica 10.5.8 キーを押します。

5. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから [2] を押してアップグレードを続行します。  
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、[Informatica privacy policy](#) に従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。
6. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。  
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
7. プロンプトで、アップグレードするバージョンの Informatica が含まれるディレクトリと、Informatica 10.5.8 をインストールするディレクトリを入力します。  
次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	Informatica のインストール先ディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' <b>注:</b> インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

8. ノードのホスト名とポート番号の変更を許可するには、**2** と入力します。  
アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。
9. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを選択します。
  - ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、**1** を押します。
  - インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、**2** を押します。
 デフォルトは 1 です。
10. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。  
デフォルトは 1 です。
11. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。



Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

**注:** Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは次のディレクトリに作成されます: <Informatica installation directory>\isp\config\keys

12. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。

13. アップグレード情報を確認し、**[Enter]** キーを押して続行します。

インストーラによって、サーバーファイルが Informatica 10.5.8 のインストールディレクトリにコピーされます。

アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

14. **Enter** キーを押します。

15. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、ドメイン環境設定リポジトリに使用するデータベースを選択します。

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [18](#) に進みます。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリに使用できるデータベースを示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリ用データベースのタイプ。次のオプションから選択します。 1 - Oracle 2 - Microsoft SQL Server 3 - IBM DB2 4 - Sybase ASE 5 - PostgreSQL

16. データベースユーザーアカウントのプロパティを入力します。

以下の表に、データベースユーザーアカウントのプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースユーザー ID	ドメイン設定データベースのユーザーアカウントの名前。
ユーザーパスワード	ドメイン環境設定データベースのユーザーアカウントのパスワードです。

17. データベースのパラメータを入力します。セキュアなドメイン環境設定リポジトリを作成しない場合は、データベース用のパラメータを入力します。

- a. IBM DB2 を選択した場合は、テーブルスペースを設定するかどうかを選択し、テーブルスペース名を入力します。

以下の表に、IBM DB2 データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
テーブルスペースの設定	単一パーティションのデータベースでは、いいえを選択した場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。複数パーティションのデータベースでは、はいを選択する必要があります。 テーブルスペースを指定するかどうかを選択します。 1 - いいえ 2 - はい
テーブルスペース	テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。 単一パーティションのデータベースでは、テーブルを作成するテーブルスペースの名前を入力します。 複数パーティションのデータベースでは、データベースのカatalogパーティション内に存在するパーティション化されていないテーブルスペースの名前を指定します。

- b. Microsoft SQL Server を選択した場合は、データベースのスキーマ名を入力します。

以下の表に、Microsoft SQL Server データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
スキーマ名	ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。このパラメータが空白の場合、インストーラによりデフォルトのスキーマにテーブルが作成されます。

- c. JDBC URL 情報を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**1** を押します。カスタム JDBC 接続文字列を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**2** を押します。
- d. JDBC 接続情報を入力します。
- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、JDBC の URL のプロパティを指定します。

以下の表に、データベース接続情報を示します。

プロンプト	説明
データベースホスト名	データベースのホスト名。
データベースポート番号	データベースのポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。 - PostgreSQL: データベース名を入力します。
JDBC パラメータの設定	追加の JDBC パラメータを接続文字列に追加するかどうかを選択します。 1 - はい 2 - いいえ [はい] を選択する場合は、パラメータを入力するか Enter キーを押してデフォルトを受け入れます。[いいえ] を選択した場合は、インスト ーラによりパラメータを使用せずに JDBC 接続文字列が作成されます。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、接続文字列を入力します。  
JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Oracle database through Oracle Connection Manager を介して Oracle データベースに接続するには、次の接続文字列を使用します。

```
jdbc:Informatica:oracle:TNSNamesFile=<fully qualified path to the tnsnames.ora file>;TNSServerName=<TNS name>;
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Windows NT 資格情報を使用する Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server でのモデルリポジトリデータベースの Windows NT 資格情報を指定した場合は、接続文字列構文を指定して、認証方法を NTLM として含めます。

Windows NT 資格情報を持つデフォルトインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Windows NT 資格情報を持つ名前付きインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>\<named instance name>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

#### Microsoft Azure SQL

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;En  
ryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=fal  
se
```

#### Active Directory 認証を使用する Azure SQL Database

```
jdbc:informatica: sqlserver://  
<host_name>:<port_number>;database=<database_name>;encrypt=true;AuthenticationMethod=ActiveDi  
rectoryPassword;trustServerCertificate=false;hostNameInCertificate=*.database.windows.net;log  
inTimeout=<seconds>
```

#### PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

#### Azure PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database  
name>;EncryptionMethod=SSL;ValidateServerCertificate=true;CryptoProtocolVersion=TLsv1.2;
```

#### Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

18. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。  
以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	アップグレードするノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアパスワードを入力します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルを入力します。 このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。 作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。 作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

19. ドメインコンポーネントに割り当てられているポート番号が表示されます。  
ポート番号を指定するか、デフォルトのポート番号を使用することができます。  
以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

[インストール後のサマリ] ウィンドウには、アップグレードが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。また、インストールされたコンポーネントとその設定のステータスも表示されます。

アップグレードログファイルを表示して、インストーラが実行したアップグレードタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定プロパティを確認できます。

# サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。

ユーザーの操作なしで Informatica サービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica サービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

## ノード設定の変更の完了

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行したという理由で、ドメインのアップグレード中にノード設定の変更を選択した場合は、アプリケーションサービスをアップグレードする前に追加のタスクを実行する必要があります。

次の追加タスクを実行する必要があります。

1. 環境変数を設定します。
2. 動的ポート番号の範囲の確認
3. ノードバックアップディレクトリの場所を確認します。
4. PowerExchange® アダプタを設定します。

**注:** ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行したという理由で、ドメインのアップグレード時にノード設定の変更を選択した場合、追加のタスクを実行する必要はありません。

## ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

## ロケール環境変数の設定

LANG、LC\_CTYPE、または LC\_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

### Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

### Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS\_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS\_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american\_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8
```

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

## ライブラリパス環境変数の設定

データ統合サービスのプロセスが実行されるマシンで、ライブラリパスの環境変数を設定します。変数名と要件は、プラットフォームとデータベースによって異なります。

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数を設定します。

以下の表に、各種データベースの LD\_LIBRARY\_PATH に対して設定する値を示します。

データベース	値
Oracle	<データベースパス>/lib
IBM DB2	<データベースパス>/lib
Sybase ASE	「\${SYBASE_OCS}/lib:\${SYBASE_ASE}/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}」
Teradata	<データベースパス>/lib
ODBC	<CLOSEDODBCHOME>/lib
PostgreSQL	\$PGHOME/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}

## 動的ポート番号の範囲の確認

移行されたノードをアップグレードする場合、アップグレードウィザードは、ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるデフォルトの範囲のポート番号を割り当てます。

動的ポート番号のデフォルトの範囲は、6013～6113 です。Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ポート番号のデフォルトの範囲が使用可能になっていることを確認します。このポート番号の範囲を使用できない場合は、Administrator ツールを使用して範囲を更新します。ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションで、サービスプロセスの動的ポート番号の最小値と最大値を設定します。

## ノードバックアップディレクトリの確認

Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ノードのバックアップディレクトリにアクセスできることを確認します。Administrator ツールで、ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションの【バックアップディレクトリ】プロパティを表示します。

## PowerExchange アダプタの設定

以前のインストールに PowerExchange アダプタが含まれていた場合は、アップグレードされたバージョンの Informatica を実行するマシンで PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。



## 第 9 章

# アプリケーションサービスをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica の環境変数の設定, 105 ページ](#)
- [ロケール環境変数の設定, 106 ページ](#)
- [Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認, 106 ページ](#)
- [ブラウザのキャッシュをクリアする, 107 ページ](#)

## Informatica の環境変数の設定

INFA\_DOMAINS\_FILE および INFA\_HOME の各環境変数を設定して、ドメインおよびインストール場所の設定を格納できます。

### INFA\_DOMAINS\_FILE

インストーラにより、domains.infa ファイルが Informatica インストールディレクトリに作成されます。domains.infa ファイルには、ドメイン名、ドメインホスト名、およびドメインホストのポート番号など、ドメイン内のゲートウェイノードの接続情報が含まれています。

INFA\_DOMAINS\_FILE 変数の値を、domains.infa ファイルのパスおよびファイル名に設定します。

Informatica サービスをインストールするマシンで INFA\_DOMAINS\_FILE 変数を設定します。Windows では、INFA\_DOMAINS\_FILE をシステム変数として設定します。

### INFA\_HOME

INFA\_HOME を使用して、Informatica インストールディレクトリを指定します。Informatica ディレクトリ構造を変更する場合は、環境変数に Informatica インストールディレクトリの場所、またはインストールされた Informatica ファイルがあるディレクトリの場所を設定する必要があります。

例えば、任意の Informatica ディレクトリに対してソフトリンクを使用します。いずれの Informatica アプリケーションやサービスでも、実行する必要があるその他の Informatica コンポーネントを見つけられるように INFA\_HOME を設定するには、INFA\_HOME に Informatica インストールディレクトリの場所を設定します。

## ロケール環境変数の設定

LANG、LC\_CTYPE、または LC\_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

### Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

### Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS\_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS\_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american\_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8
```

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

## Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認

Administrator ツールへの接続を保護するために作成したキーストアファイルを使用していた場合は、Administrator ツールにアクセスする前に、そのキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前のドメインでインストーラによって作成されたデフォルトのキーストアファイルを使用していた場合は、キーストアファイルの場所を確認する必要はありません。

実行する必要があるタスクは、キーストアファイルを以前に保存した以下の場所に応じて異なります。

### 以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。

2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、ゲートウェイノードを更新します。

infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

#### 以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合にキーストアファイルを格納した場合は、ゲートウェイノードを実行するマシンがこのファイルにアクセスできることを確認します。

## ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

## 第 10 章

# アプリケーションサービスのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービスのアップグレードの概要, 108 ページ](#)
- [アップグレードウィザードの実行, 110 ページ](#)
- [モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認, 110 ページ](#)

## アプリケーションサービスのアップグレードの概要

アプリケーションサービスのアップグレードプロセスは、アップグレード前の Informatica サービスのバージョンによって決まります。

Informatica サービスの各バージョンでは、アプリケーションサービスのアップグレードが必要となります。アプリケーションサービスをアップグレードする場合、依存サービスもアップグレードする必要があります。アプリケーションサービスのアップグレード時には、アップグレードプロセスによって、そのサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

[サービスアップグレード] ウィザード、各サービスの [アクション] メニュー、またはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードは、適切な順序で複数のサービスをアップグレードし、依存関係をチェックします。各サービスの [アクション] メニューまたはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードする場合は、適切な順序でアプリケーションサービスをアップグレードし、依存サービスをアップグレードしたことを確認する必要があります。

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、サービスによって異なります。

## サービスをアップグレードする特権

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、アプリケーションサービスによって異なります。

サービスアップグレードウィザードにアクセスするには、ドメインに対する管理者ロールが必要です。

以下のアプリケーションサービスをアップグレードするには、ユーザーにこれらのロール、特権、および権限が必要です。

## モデルリポジトリサービス

サービスのアップグレードウィザードを使用してモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに以下の資格情報が必要です。

- ドメインの管理者ロール。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

[アクション] メニューまたはコマンドラインからモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに次の資格情報が必要です。

- ドメインに対するサービスの管理特権、およびモデルリポジトリサービスでの権限。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

## データ統合サービス

データ統合サービスをアップグレードするには、ユーザーにデータ統合サービスでの管理者ロールが必要です。

## コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービスをアップグレードするには、ユーザーにコンテンツ管理サービスでの管理者ロールが必要です。

## PowerCenter リポジトリサービス

PowerCenter リポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および PowerCenter リポジトリサービスでの権限が必要です。

## Metadata Manager サービス

Metadata Manager サービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および Metadata Manager サービスでの権限が必要です。

# 以前のバージョンからのサービスアップグレード

以前のバージョンからアップグレードする場合、一部のアプリケーションサービスでアップグレードが必要です。前のバージョンで使用したアプリケーションサービスをアップグレードします。

アップグレード前に、Metadata Manager サービスが無効になっていることを確認します。他のアプリケーションサービスがすべて有効になっていることを確認します。

アプリケーションサービスをアップグレードするには、次のサービスと関連データベースをこの順にアップグレードします。

1. モデルリポジトリサービス
2. データ統合サービス
3. データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
4. Metadata Manager サービス
5. PowerCenter リポジトリサービス

**注:** 他のアプリケーションサービスをすべてアップグレードする場合は、アップグレードプロセスによって、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

# アップグレードウィザードの実行

アプリケーションサービスと、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツのアップグレードには、サービスアップグレードウィザードを使用します。サービスアップグレードウィザードには、アップグレードが必要なサービスと関連するデータベースとともにアップグレード済みのサービスのリストが表示されます。現在または前のアップグレードレポートを保存することもできます。

1. Informatica Administrator のヘッダ領域で、**【管理】** > **【アップグレード】** をクリックします。
2. アップグレードするアプリケーションサービスと関連データベースを選択します。
3. 必要に応じて、**【アップグレード後、サービスが自動的に再起動します】** を指定します。  
アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択した場合は、アップグレードウィザードによってサービスがアップグレード後に再起動されます。
4. **【次へ】** をクリックします。
5. 依存関係エラーが存在する場合は、**【依存関係エラー】** ダイアログボックスが表示されます。依存関係エラーを確認し、**【OK】** をクリックします。次に、依存関係エラーを解決して **【次へ】** をクリックします。
6. リポジトリログイン情報を入力します。
7. **【次へ】** をクリックします。  
サービスアップグレードウィザードによって各アプリケーションサービスと関連データベースがアップグレードされ、ステータスと処理の詳細が表示されます。
8. アップグレードが完了すると、**【サマリ】** セクションにアプリケーションサービスとアップグレードステータスのリストが表示されます。各サービスをクリックすると、**【サービスの詳細】** セクションにアップグレードの詳細が表示されます。
9. 必要に応じて、**【レポートの保存】** をクリックして、アップグレードの詳細をファイルに保存します。  
レポートを保存しないことにした場合は、次回サービスアップグレードウィザードを起動したときに **【前のレポートの保存】** をクリックできます。
10. **【閉じる】** をクリックします。
11. アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択しなかった場合は、アップグレードしたサービスを再起動します。

アップグレードレポートを表示し、保存できます。2 回目にサービスアップグレードウィザードを実行する場合、**【前のレポートの保存】** オプションが表示されます。サービスをアップグレードした後にアップグレードレポートを保存しなかった場合は、このオプションを選択して、前回のアップグレードレポートを表示または保存できます。

## モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認

モデルリポジトリサービスをアップグレード後は、モデルリポジトリサービスログをチェックしてアップグレードが正常に完了したことを確認します。

## オブジェクト依存関係のグラフ

モデルリポジトリサービスをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはモデルリポジトリのコンテンツをアップグレードし、オブジェクトの依存関係のグラフを再作成します。

アップグレードプロセスでモデルリポジトリのコンテンツのアップグレード中に致命的なエラーが発生した場合、サービスのアップグレードは失敗します。Administrator ツールまたはコマンドラインプログラムによって、アップグレードをもう一度実行する必要があることが知らされます。

オブジェクト依存関係のグラフの再構築中にアップグレードプロセスで致命的なエラーが発生する場合、サービスのアップグレードは成功します。オブジェクト依存関係のグラフを再構築するまでは、Developer tool でオブジェクトの依存関係を表示することはできません。

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、モデルリポジトリサービスログに次のメッセージが含まれることを確認します。

```
MRS_50431 "Finished rebuilding the object dependency graph for project group '<project group>'."
```

ログにこのメッセージが存在しない場合は、`infacmd mrs rebuildDependencyGraph` コマンドを実行してオブジェクト依存関係のグラフを再構築します。この再構築プロセスが完了するまで、モデルリポジトリオブジェクトにユーザーアクセスがあってはなりません。完了前にユーザーがアクセスすると、オブジェクト依存関係のグラフが正確でなくなることがあります。サービスのアップグレードを行う前にモデルリポジトリサービスからログアウトするようユーザーに要請します。

`infacmd mrs rebuildDependencyGraph` コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
rebuildDependencyGraph
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-SecurityDomain|-sdn> security_domain]
<-UserName|-un> user_name
<-Password|-pd> password
<-ServiceName|-sn> service_name
[<-ResilienceTimeout|-re> timeout_period_in_seconds]
```

## Model Repository サービスの詳細プロパティ

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、最大ヒープサイズと `MaxMetaspaceSize` 値を設定することができます。サービスをアップグレードする前に、**-Xss** 値を設定します。サービスをアップグレードした後に、**-Xss** 値をリセットする必要があります。

モデルリポジトリサービスについて、以下の詳細プロパティを設定してください。

### 最大ヒープサイズ

プロセスをアップグレードする前に、モデルリポジトリサービスの**最大ヒープサイズ**プロパティ値が 4GB 未満である場合、このプロパティ値を 4GB に設定することができます。アップグレードした後、プロパティ値をアップグレード前の値にリセットするか、またはグローバルカスタマサポートがお使いの環境で推奨している値へリセットします。

### JVM コマンドラインオプション

**-Xss** JVM コマンドラインオプションを設定します。モデルリポジトリサービスアップグレードをアップグレードする前に、**-Xss** 値を 1m に設定します。アップグレードした後、**-Xss** オプションをアップグレード前の値にリセットします。デフォルト値は 512k です。

モデルリポジトリサービスに詳細プロパティ値を設定するには、> **サービスおよびノードの管理**に移動して、モデルリポジトリサービスを選択し、**プロパティ** > **詳細プロパティ**セクションを編集します。

## 第 11 章

# Informatica クライアントのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica クライアントのアップグレードの概要, 112 ページ](#)
- [Informatica クライアントをアップグレードする前に, 112 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 114 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 115 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 116 ページ](#)

## Informatica クライアントのアップグレードの概要

クライアントインストーラを使用して Informatica クライアントツールの以前のバージョンをアップグレードします。アップグレードする製品に応じて、Developer ツール、PowerCenter Client、またはその両方をアップグレードできます。

アップグレードするクライアントをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。以下のいずれかの方法で Informatica クライアントツールをアップグレードできます。

- グラフィカルモードでのアップグレード。Informatica クライアントツールをグラフィカルモードでアップグレードします。インストーラを使用してアップグレードプロセスを実行できます。
- サイレントモードでのアップグレード。アップグレードオプションを含むプロパティファイルを使用して Informatica クライアントツールをアップグレードします。

アップグレードプロセスでは、JRE ライブラリと DataDirect ODBC ドライバもアップグレードされます。

アップグレードは、インストールファイルをダウンロードしたディレクトリのルートから実行できます。

## Informatica クライアントをアップグレードする前に

インストールの前提条件および最小要件を満たしていることを確認します。Informatica クライアントツールをアップグレードするマシンが正しく設定されていない場合、アップグレードに失敗する場合があります。



## インストーラパッケージのチェックサムの確認

クライアントインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Windows での Informatica クライアントのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1058_client_winem-64t.zip	87005947	3921362250 バイト

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

## Informatica Developer の要件の確認

以下の表に、Informatica Developer をアップグレードするための最小要件を示します。

コンポーネント	要件
プロセッサ	1 CPU
RAM	1 GB
ディスク容量	8.505GB

## PowerCenter Client の要件の確認

以下の表に、PowerCenter Client をアップグレードするための最小要件を示します。

コンポーネント	要件
プロセッサ	1 CPU
RAM	1 GB
ディスク容量	4.255GB

Windows では、zip ファイル名を含むインストールディレクトリパスの全体の長さが 60 文字以下でなければなりません。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

# グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、アップグレードするバージョンに関する情報と、アップグレードに関連付けられているディレクトリに関する情報を指定します。

1. すべてのアプリケーションを終了します。
2. ルートディレクトリから `install.bat` を実行します。  
問題が発生した場合は、次の場所から `install.exe` を実行します。  
<Informatica installation directory>\client
3. Informatica のインストールおよび製品使用ツールキットの利用規約をお読みになったら **【契約条項に同意します】** を選択します。  
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、  
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。
  - a. 契約条項に同意しない場合は、**1** キーを押します。
  - b. 契約条項に同意する場合は、**2** キーを押します。
4. インストールを続行する前に、**【アップグレード前提条件】** ページでシステム要件を確認し、**【次へ】** をクリックします。
5. **【ディレクトリの選択】** ページで、Informatica バージョンのディレクトリとソースディレクトリおよびターゲットディレクトリを入力します。  
次の表に、指定するディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica クライアントのディレクトリ	アップグレードする Informatica クライアントツールのバージョンを含むディレクトリ
のクライアントツールのディレクトリ	クライアントツールをインストールするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。インストールディレクトリは、現在のマシンに存在する必要があります。パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @[* \$ # ! % ( ) { } [ ] , ; ' <b>注:</b> インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

6. **【次へ】** をクリックします。
7. **【インストール前のサマリ】** ページで、インストール情報を確認し、**【インストール】** をクリックします。  
インストーラによって、Informatica クライアントファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
8. **【インストール後のサマリ】** ページで、アップグレードが成功したかどうかを確認し、**【完了】** をクリックしてインストーラを終了します。
9. クライアントのアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

インストーラログファイルを参照すると、インストーラで実行されるアップグレードタスクの詳細を取得できます。

## サイレントモードでのアップグレード

ユーザーの操作なしで Informatica クライアントツールをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica クライアントツールをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica クライアントをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。

### プロパティファイルの作成

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのプロパティファイルの名前は `SilentInput.properties` で、クライアントインストーラディレクトリのルートにあります。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. `SilentInput.properties` という名前のファイルを探します。  
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica クライアントツールをインストールするか、アップグレードするかを指定します。 以前のバージョンの Informatica からアップグレードするには、値を 1 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica クライアントツールをインストールするディレクトリです。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica ツールの以前のバージョンのディレクトリです。

プロパティ名	説明
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を <code>true</code> に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を <code>false</code> に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。

4. プロパティファイルを保存します。

## サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. クライアントインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む `SilentInput.properties` ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントアップグレードプロセスを開始するには、`silentInstall.bat` を実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。`Informatica_<Version>_Services_InstallLog.log` がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、インストールログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。

5. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

## アップグレードした後に

アップグレード後、プロファイルにデータドメインをインポートします。

定義済みのデータドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリに追加するには、**[ウィンドウ] > [設定] > [Informatica] > [データドメイングロッサリ] > [インポート]** メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomain.xml` ファイルを Developer tool にインポートします。

データドメインに関連付けられたルールの表示やルールの変更を行うには、Developer tool の **[ファイル] > [インポート]** メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomainRule.xml` ファイルをインポートします。

## 第 12 章

# アップグレードした後に

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica ドメイン, 117 ページ](#)
- [別のデータベースへの移行, 118 ページ](#)
- [ドメインへのクライアントの接続の保護, 119 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード, 121 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリサービス, 121 ページ](#)
- [PowerCenter 統合サービス, 121 ページ](#)
- [Data Integration Service, 121 ページ](#)
- [ログイベントディレクトリの更新, 122 ページ](#)
- [構成ファイルの更新, 122 ページ](#)
- [Java 11 以降での廃止されたガベージコレクションオプションの削除, 122 ページ](#)
- [アナリストサービス, 123 ページ](#)
- [Metadata Manager エージェント, 124 ページ](#)
- [Metadata Manager サービス, 125 ページ](#)

## Informatica ドメイン

アップグレードしたら、ドメインのアップグレード後のタスクを実行します。

### ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

**ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。**

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

**ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。**

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもで

きます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/infra_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

## Informatica クライアントをアップグレードします。

ドメインをアップグレードした後に、Informatica クライアントツールを同じ Informatica バージョンにアップグレードします。

## 別のデータベースへの移行

ドメインとサービスをアップグレードした後、既存のサービス用にサポートされているデータベースを構成します。

1. サポートされるデータベースを作成します。データベースの作成に関する詳細については、『*Informatica アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。
2. ドメインとリポジトリをバックアップします。
  - ドメインをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。  
`infasetup BackupDomain`
  - PowerCenter リポジトリをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。  
`pmrep backup`
  - モデルリポジトリサービスをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。  
`infacmd mrs BackupContents`
3. ドメインをリストア、更新、および開始します。
  - ドメインをサポートされているデータベースにリストアするには、次のコマンドを入力して、データベースタイプとスキーマ名を更新します。  
`infasetup RestoreDomain`
  - ドメイン名、ノード名、およびサポートされているデータベース名を更新するには、次のコマンドを入力します。  
`infacmd isp UpdateGatewayNode`
  - ドメインを開始するには、次のコマンドを入力します: `infaservice Startup`
4. PowerCenter リポジトリサービスのデータベースを更新し、リサイクルして、PowerCenter リポジトリをリストアします。
  - サポートされているデータベースで PowerCenter リポジトリサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。  
`infacmd isp UpdateRepositoryService`
  - サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。  
`infacmd isp EnableService`
  - サポートされているデータベースタイプで PowerCenter リポジトリをリストアするには、次のコマンドを入力します。  
`pmrep restore`

5. モデルリポジトリサービスのデータベースを更新し、リサイクルして、モデルリポジトリサービスをリストアします。
  - サポートされているデータベースでモデルリポジトリサービスサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。  
infacmd mrs UpdateServiceOptions
  - サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。  
infacmd isp EnableService
  - サポートされているデータベースでモデルリポジトリサービスサービスをリストアするには、以下のコマンドを入力します。  
infacmd mrs restoreContents
6. 必要なサービスのデータベース固有の環境変数を設定します。  
 たとえば、PowerCenter リポジトリサービスに PostgreSQL の以下の環境変数を設定します。  
 PGSERVICE: Set to the location of the pg\_service.conf file:  
 <pg\_service.conf file directory>/pg\_service.conf  
 PGHOME: Set to PostgreSQL client install location. For example, /usr/pgsql -10  
 Add to PATH: \$PGHOME/bin:\${PATH}  
 Add to LD\_LIBRARY\_PATH: \$PGHOME/lib:\${LD\_LIBRARY\_PATH}  
 Oracle では、Oracle の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。  
 ORACLE\_HOME: Set to Oracle client install location. For example, /u01/app/oracle/product/19.0.0.0  
 Add to PATH: \$ORACLE\_HOME/bin:\${PATH}  
 Add to LD\_LIBRARY\_PATH: \$ORACLE\_HOME/lib:\${LD\_LIBRARY\_PATH}  
 Add TNS\_ADMIN. The TNS entries are in the oratns folder. For example, /misc/platqa/ISPAutomation/oratns  
 DB2 では、DB2 の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。  
 DB2DIR: Set to DB2 client install location. For example, /opt/ibm/db2/V11.1  
 DB2INSTANCE: Instance name of the DB2 client.  
 Add to PATH: \$DB2DIR/bin:\${PATH}  
 Add to LD\_LIBRARY\_PATH: \$DB2DIR/lib:\${LD\_LIBRARY\_PATH} OR \$DB2DIR/lib64:\${LD\_LIBRARY\_PATH}  
 DSN を使用する SQL Server では、Informatica サービスを実行するマシンに DSN エントリを作成します。DSN を有効にして、管理者ツールで DSN 名を指定できます。  
 SQL Server on Linux では、SQL Server の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。  
 ODBC\_HOME=\$INFA\_HOME/ODBC<version>  
 ODBCINI=\$INFA\_HOME/ODBC<version>/odbc.ini  
 ODBCINST=\$INFA\_HOME/ODBC<version>/odbcinst.ini

## ドメインへのクライアントの接続の保護

以前のバージョンで、クライアントアプリケーションと Informatica ドメイン間で安全な通信を有効にした場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認するか、または新しいキーストアを生成する必要があります。Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成する必要があります。他のクライアントアプリケーションを使用する場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認する必要があります。

クライアントアプリケーションとサービス間で安全な接続を設定する場合は、セキュアな HTTPS 接続用のキーおよび証明書を含むキーストアファイルを指定します。アップグレード後に、新しいキーストアファイルを生成するか、またはキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスでは、キーストアファイルも場所も更新されません。

**注:** 512 ビット未満の RSA 暗号化を使用してプライベートキーと SSL 証明書を作成した場合は、新しい SSL 証明書ファイルを作成する必要があります。FREAK 脆弱性により、512 ビット未満の RSA 暗号化はサポートされていません。

実行する必要があるタスクは、使用しているクライアントアプリケーションによって異なります。  
Metadata Manager

Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルの生成に使用された Java のバージョンと、Informatica とともにインストールされた Java のバージョンが一致することを確認するために、キーストアファイルを再生成します。Java のバージョンが一致しない場合は、Metadata Manager で操作を実行するユーザーに対して、[Metadata Manager サービスに接続できません] というエラーが表示されます。

新しいキーストアファイルを生成するには、次の手順を実行します。

1. Metadata Manager Web アプリケーションに対して安全な接続を設定するために必要なキーおよび証明書を含む新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルを生成するには、現在のバージョンの Informatica とともにインストールされたキーツールユーティリティを使用します。

**注:** Metadata Manager サービスは RSA 暗号化を使用します。そのため、RSA アルゴリズムで生成されたセキュリティ証明書を使用することをお勧めします。

2. Metadata Manager サービスが稼働しているマシンからアクセス可能なディレクトリにキーストアファイルを保存します。
3. Administrator ツールを使用して、Metadata Manager サービスのキーストアファイルを更新します。

#### 他の Web クライアントアプリケーション

他の Web クライアントアプリケーションを使用する場合、実行する必要があるタスクは、次のいずれの場所にキーストアファイルを格納したかによって異なります。

#### 以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、アプリケーションサービスを更新します。

Administrator ツールを使用して、適切なアプリケーションサービスのキーストアファイルの場所を更新します。例えば、Analyst ツールのセキュリティにキーストアファイルが使用されている場合は、アナリストサービスのプロパティでキーストアファイルの場所を更新します。

#### 以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所にキーストアファイルを保存した場合は、アプリケーションサービスが実行されるマシンからそのキーストアファイルにアクセスできることを確認します。



# Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード

アップグレードを行うと、デフォルトで、Microsoft SQL Server 接続が OLEDB プロバイダタイプに設定されます。

ODBC プロバイダタイプを使用するようにすべての Microsoft SQL Server 接続をアップグレードすることをお勧めします。次の形式で Informatica サービスを使用すると、すべての Microsoft SQL Server 接続を ODBC プロバイダタイプにアップグレードすることができます。

```
ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini
```

環境変数を設定したら、Informatica サービスをホストするノードを再起動する必要があります。

## PowerCenter リポジトリサービス

アップグレード後、PowerCenter リポジトリサービスを排他モードで実行して、リポジトリメタデータをアップグレードします。

リポジトリメタデータをアップグレードしたら、モードを通常モードに変更し、PowerCenter リポジトリサービスを再起動します。

## PowerCenter 統合サービス

アップグレード後、PowerCenter 統合サービスのオペレーティングシステムプロファイルに umask を設定します。

オペレーティングシステムプロファイルを使用したバージョンからアップグレードした場合は、umask 設定値を設定し、STM が書き込むファイルのセキュリティを変更してください。

例えば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。umask の設定を変更した場合は Informatica サービスを再起動する必要があります。

## Data Integration Service

アップグレード後に、データ統合サービスの HTTP プロキシサーバーのパスワードをリセットします。

Data Integration Service が Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

パスワードをリセットしないと、データ統合サービスで Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを正常に処理できません。

Administrator ツールで、データ統合サービス用の HTTP プロキシサーバーのパスワードをリセットします。

## ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

**ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。**

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

**ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。**

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもできます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/infra_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

## 構成ファイルの更新

アップグレードを実行すると、`odbc.ini`、`odbcinst.ini`、`sapnwrfc.ini`、`infaservice.sh` などの構成ファイルがインストーラによって上書きされます。いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップ済みであることを確認します。その後、バックアップファイルから最新のインストール済みファイルに変更内容を手動でマージできます。例えば、`infaservice.sh` にいくつかの変数または Java オプションが含まれている場合は、変更の内容を最新のインストールファイルパスに手動でマージする必要があります。

アップグレード後、最新の構成の変更内容を次のインストールファイルパスに手動でマージします。

```
$INFA_HOME/ODBC7.1/odbc.ini
$INFA_HOME /ODBC7.1/odbcinst.ini
$INFA_HOME/server/bin/sapnwrfc.ini
$INFA_HOME/tomcat/bin/infaservice.sh
```

## Java 11 以降での廃止されたガベージコレクションオプションの削除

バージョン 10.5.7 以降から、Informatica は JDK バージョン 11 を使用します。Java 11 以降のバージョンでは、JDK バージョン 8 の `ConcMarkSweepGC` (CMS) および `UseParNewGC` ガベージコレクタは廃止されました。互換性を維持し、パフォーマンスを向上させるには、推奨されるガベージコレクタである `G1GC` に移行する必要があります。

バージョン 10.5.7 以降から、スケジューラサービスやデータ統合サービスなどの一部のサービスは、廃止されたガベージコレクションオプションが原因でアップグレード後に開始されない場合があります。

この問題を解決するには、Administrator ツールで影響を受けるサービスに移動し、JVM コマンドラインオプションの詳細プロパティから次のオプションを削除します。

-XX:+UseConcMarkSweepGC

古い世代の CMS ガベージコレクタの使用を有効にします。CMS は、デフォルトのガベージコレクタ (G1) の代替手段であり、アプリケーションのレイテンシ要件を満たすことにも重点を置いています。

-XX:+UseParNewGC

新しい世代のコレクションへの並列スレッドの使用を有効にします。

G1GC オプションがデフォルトで有効になっていることを確認するには、次のオプションを使用します: -XX:+UseG1GC。G1GC オプションがデフォルトで有効になっていない場合は、影響を受けるサービスの JVM コマンドラインオプションに次の G1GC オプションを追加します。

-XX:+UseG1GC

ガベージファースト (G1) ガベージコレクタの使用を有効にします。これは、大量の RAM を搭載したマルチプロセッサマシンを対象としたサーバースタイルのガベージコレクタです。GC の一時停止時間の目標を達成することを優先しながら、大きなヒープと低い GC レイテンシ要件を持つアプリケーションの良好なスループットを維持します。

要件のチューニング用に、次のようなオプションを指定することができます: -XX:MaxGCPauseMillis および -XX:InitiatingHeapOccupancyPercent。

サービスをリサイクルして、更新された設定を Administrator ツールで適用してください。

## アナリストサービス

アップグレードしたら、アナリストサービスごとにアップグレード後のタスクを実行します。

### フラットファイルキャッシュの場所の確認

アップグレード後に、フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内にフラットファイルキャッシュディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスとデータ統合サービスの両方がそのディレクトリにアクセスできることを確認します。

アナリストサービスとデータ統合サービスが異なるノードで実行されている場合は、共有ディレクトリを使用するようにフラットファイルディレクトリを設定します。データ統合サービスがプライマリおよびバックアップノード、またはグリッドで実行される場合、各データ統合サービスプロセスは共有ディレクトリのファイルにアクセスできる必要があります。

フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認するには、アナリストサービスのランタイムプロパティにある **【フラットファイルキャッシュの場所】** プロパティを表示します。

## 一時エクスポートファイルの場所の確認

アップグレード後に、一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定する必要があります。Analyst ツールはこの場所を使用して、エクスポートするビジネス用語集を保存します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内に一時エクスポートファイルディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスを実行しているマシンがそのディレクトリにアクセスできることを確認します。一時エクスポートファイルディレクトリの場所を設定していない場合は、エクスポート時に Analyst ツールが用語集を保存できる場所を指定します。

一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定するには、アナリストサービスのビジネス用語集のプロパティで **【一時エクスポートファイルディレクトリ】 Temporary Export File Directory** プロパティを表示します。

## アナリストサービスのリサイクル

アップグレード後に Analyst ツールにアクセスするには、アナリストサービスをリサイクルします。アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスおよびデータ統合サービスのアップグレード手順とアップグレード後の手順を完了します。

アナリストサービスをリサイクルしたら、少なくとも 10 分間待機し、その後で **【用語集】** ワークスペースにアクセスします。

アナリストサービスをリサイクルする前に、次のタスクが実行されていることを確認します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード

**注:** アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスとデータ統合サービスが実行されている必要があります。

## Metadata Manager エージェント

アップグレード後、各 Metadata Manager Agent をアンインストールしてから再インストールして、Metadata Manager がメタデータソースからメタデータを抽出できるようにする必要があります。リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. Metadata Manager Agent を停止します。
2. Metadata Manager Agent を再インストールします。

Metadata Manager Agent のインストールの詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

# Metadata Manager サービス

Metadata Manager エージェントを再インストールしたら、Metadata Manager サービスごとに次のアップグレード後のタスクを実行します。

1. Metadata Manager プロパティファイルにすべてのカスタマイズが含まれるように更新します。
2. Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスを UNIX 上で実行する場合は、ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。
3. Cognos 依存関係の JAR ファイルを更新します。
4. Metadata Manager サービスを有効にします。
5. Netezza リソースを再作成します。
6. 以前のバージョンでいずれかのビジネスインテリジェンスリソースに【ワーカースレッド】設定プロパティを設定した場合は、【マルチスレッド】設定プロパティを同じ値に設定します。

## Metadata Manager プロパティファイルの更新

以前のインストールディレクトリ内の imm.properties ファイルを現在のバージョンと比較します。必要に応じて、現在のバージョンの imm.properties ファイルを更新します。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes

変更は、Metadata Manager サービスを有効にすると反映されます。

## UNIX での ODBCINST 環境変数の確認

Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスが UNIX 上で実行される場合は、PowerCenter 統合サービスを実行するマシンに ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。

PowerCenter 統合サービスは、IME ベースのファイルからメタデータを抽出してそのメタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードするワークフローを実行します。PowerCenter 統合サービスは、ODBC を使用して Microsoft SQL Server データベースに接続します。UNIX では、ODBCINST 環境変数が odbinst.ini ファイルの場所に設定されている必要があります。このように設定されていないと、PowerCenter 統合サービスは ODBC ドライバにアクセスできません。

PowerCenter 統合サービスを実行するマシンで、ODBCINST 環境変数が次の値に設定されていることを確認します。

ODBCINST=<INFA\_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini

環境変数が設定されていない場合は、設定してからドメインを再起動します。

## Cognos 依存関係の JAR ファイルの更新

Cognos 依存関係に関連付けられた JAR ファイルを置き換えます。

1. 次の JAR ファイルをダウンロードします。
  - <https://repo1.maven.org/maven2/org/apache/axis/axis/1.4/axis-1.4.jar>
  - <https://repo1.maven.org/maven2/xerces/xercesImpl/2.12.2/xercesImpl-2.12.2.jar>
2. JAR ファイルを次の場所にコピーします:<Metadata Manager Agent installation directory>\java\CognosRepository

3. Metadata Manager Agent サービスを開始します。

## リソースのページおよびリロード

Metadata Manager の各バージョンでは、一部のモデルが変更されています。モデルに新しいクラス属性などの小さな変更点がある場合は、そのモデルをベースにするリソースをページしてリロードする必要があります。

次の表に、ページおよびリロードが必要なリソースを示します。

メタデータソースタイプ	リソースタイプ
ビジネスインテリジェンス	Business Objects Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
データモデリング	SAP Power Designer

ビジネスインテリジェンスおよびデータベース管理リソースの接続情報が失われることを防ぐため、次の順序でリソースをページしてリロードします。

1. データベース管理リソース
2. Tableau リソース
3. PowerCenter リソース

## Informatica Platform リソースのアップグレード

Informatica アプリケーションからメタデータを抽出する Informatica Platform リソースを作成した場合は、リソースのアップグレードが必要です。リソースをアップグレードするには、リソースを再作成するか、またはコマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定します。

PowerCenter をアップグレードすると、データ統合サービスとモデルリポジトリサービスもアップグレードされます。ただし、Metadata Manager のみをアップグレードした場合、データ統合サービスとモデルリポジトリサービスはデフォルトではアップグレードされません。必要に応じて、Administrator ツールでサービスをアップグレードできます。

Informatica Platform リソースのアップグレード方法は、アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしたかどうかによって異なります。

### PowerCenter をアップグレードした場合

アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードした場合は、アップグレード後にリソースを再作成する必要があります。新しいリソースを作成したら、古いリソースをページおよび削除できます。

### Metadata Manager のみアップグレードした場合

アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしなかった場合は、コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定する必要があります。

コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定するには、次の手順を実行します。

1. Informatica グローバルカスタマサポートに連絡して、アップグレード後のバージョンで使用するコマンドラインユーティリティの zip ファイルを入手します。
2. Metadata Manager サービスがアクセスできるディレクトリにファイルを抽出します。  
最高のパフォーマンスを得るには、Metadata Manager サービスを実行するマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。異なるマシンにファイルを抽出した場合、Metadata Manager サービスがディレクトリにアクセスするのに数分かかる可能性があります。

- リソースを編集し、[<current\_version>コマンドラインユーティリティディレクトリ] プロパティを設定します。  
このプロパティを、コマンドラインユーティリティをインストールしたディレクトリ（例：  
C:\Informatica\1041\_CLU）に設定します。
- Metadata Manager で、リソースをロードします。

Informatica Platform リソースの作成方法と、Informatica Platform リソース用コマンドラインユーティリティのインストール方法の詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』の「データ統合リソース」の章を参照してください。

## Data Transformation ファイルのコピー

Data Transformation のアップグレード後、以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ（TGP ファイル）	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ（DLL および JAR ファイル）	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

## 新機能および変更点の確認

『*Informatica の新機能および変更点*』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更点、およびアップグレード後に実行する必要があるタスクについて説明しています。実装が必要な新機能、または有効化が必要な新しいオプションのリストを確認するには、『*Informatica の新機能および変更点*』を参照してください。

## 付録 A

# アップグレードチェックリスト

この付録では、以下の項目について説明します。

- [アップグレードチェックリストの概要, 128 ページ](#)
- [ドメインをアップグレードする前に, 128 ページ](#)
- [ドメインのアップグレード, 130 ページ](#)
- [アプリケーションサービスをアップグレードする前に, 130 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのアップグレード, 130 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレード, 131 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 131 ページ](#)

## アップグレードチェックリストの概要

アップグレードのチェックリストでは、アップグレードを完了するために実行する必要があるタスクについて要約します。Informatica 製品を複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、このチェックリストを利用して実行できます。

## ドメインをアップグレードする前に

ドメインをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ❑ 『Informatica リリースノート』をお読みください。
- ❑ 次のタスクを実行して、オペレーティングシステムの要件を満たすようにマシンを設定します。
  - マシンに必要なオペレーティングシステムパッチおよびライブラリがインストールされていることを確認します。
  - マシンがドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。
  - マシンがアプリケーションサービスをアップグレードするためのハードウェア要件を満たしていることを確認します。
  - 非ネイティブ環境のディストリビューションを確認します。
  - 環境変数を確認します。



- 最大ヒープサイズの設定を確認します。
  - インストーラファイルを抽出します。
  - Informatica Upgrade Advisor を実行します。
  - 構成ファイルをバックアップします。
- ☐ Data Transformation ファイルをバックアップします。
- ☐ Administrator ツールまたは infacmd DisableService を使用して、アナリストサービスを無効にします。
- ☐ 次のタスクを実行して、PowerCenter リポジトリを準備します。
- PowerCenter リポジトリをバックアップします。
  - PowerCenter リポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、モデルリポジトリを準備します。
- モデルリポジトリをバックアップします。
  - モデルリポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、データ統合サービスを準備します。
- データ統合サービスの各プロセスの実行オプションを記録します。
  - すべてのワークフローが完了したことを確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、プロファイリングウェアハウスを準備します。
- ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。
  - データベースのユーザーアカウント権限を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、参照データのディレクトリを準備します。
- 参照データのディレクトリをバックアップします。
  - ディレクトリの場所を記録します。
- ☐ 次のタスクを実行して、Metadata Manager を準備します。
- Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
  - Metadata Manager サービスを無効にします。
  - Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。
- ☐ ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。
- ☐ 次のタスクを実行して、ドメインを準備してください。
- データベースユーザーアカウントの要件を確認します。
  - ドメインをシャットダウンします。ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。
  - ドメインをバックアップします。
- ☐ ノード設定を変更するための準備をします。
- ノード設定の変更を選択した場合は、追加のアップグレード前のタスクを実行します。

## ドメインのアップグレード

サーバーインストーラを使用してドメインをアップグレードします。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica ファイルがインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードを実行する際に、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードする場合には、ノード設定を変更するオプションを選択します。

## アプリケーションサービスをアップグレードする前に

アプリケーションサービスをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ☐ ロケール環境変数を設定します。  
ロケール設定にリポジトリのコードページとの互換性があることを確認します。
- ☐ ブラウザのキャッシュをクリアします。
- ☐ ノード設定を変更して Informatica のインストールを別のマシンに移行するオプションを選択する場合、以下のタスクを実行します。
  - 環境変数を設定します。
  - ライブラリパス環境変数を設定します。
  - ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるポート番号の範囲を確認します。
  - ノードのバックアップディレクトリがノードからアクセス可能であることを確認します。
  - PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

## アプリケーションサービスのアップグレード

各サービスバージョンではサービスのアップグレードが必要です。サービスアップグレードウィザードを使用して、サービスをアップグレードできます。

- ☐ 次のアプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権を確認します。
  - PowerCenter リポジトリサービス
  - モデルリポジトリサービス
  - PowerCenter 統合サービス
  - データ統合サービス
  - コンテンツ管理サービス
  - スケジューラサービス

- アナリストサービス
  - Metadata Manager サービス
- ☐ 次のサービスおよび関連するデータベースをアップグレードします。
- PowerCenter リポジトリサービス
  - PowerCenter 統合サービス
  - モデルリポジトリサービス
  - データ統合サービス
  - データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
  - スケジューラサービス
  - アナリストサービス
  - Metadata Manager サービス
- ☐ サービスアップグレードウィザードを実行して、アプリケーションサービスとサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツをアップグレードします。
- ☐ モデルリポジトリサービスのアップグレードを確認します。
- オブジェクト依存関係のグラフ
  - 最大ヒープサイズ

## Informatica クライアントのアップグレード

クライアントインストーラを使用してクライアントツールをアップグレードします。クライアントツールは、指定したインストールディレクトリにインストールされます。クライアントインストーラは新しくインストールしたクライアントツールを、以前のバージョンと同じ設定で設定します。

## アップグレードした後に

ドメイン、アプリケーションサービスおよびクライアントファイルをアップグレードした後に、以下のアップグレード後のタスクを実行します。

- ☐ ドメインに対して次のタスクを実行します。
- SSL 証明書ファイルを使用して以前のドメイン内の安全な通信を有効にした場合は、キーストアファイルおよびトラストストアファイルの場所を確認します。アップグレードプロセスではこれらの場所が更新されません。
  - 必要に応じて、SSL プロトコルで保護されたデータベース上にドメイン環境設定リポジトリを設定できます。
- ☐ 各データ統合サービスで次のタスクを実行します。
- HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。  
データ統合サービスが Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

- データ統合サービスを複数ノードで実行し、各サービスプロセスで異なる実行オプションを設定した場合は、[プロパティ] ビューの [実行オプション] で正しい値が使用されていることを確認します。
  - Analyst ツールまたは Developer tool でルール仕様を操作する場合は、最大ヒープサイズの値を確認します。
  - [要求ごとの最大メモリ] プロパティで、データ統合サービスのモジュールごとに適切な値が使用されていることを確認します。
- ☐ 各アナリストサービスで次のタスクを実行します。
- Kerberos 認証を使用するドメインで Business Glossary 承認ワークフローを使用する場合は、モデルリポジトリサービスのユーザー名とパスワードを入力します。
  - フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
  - Business Glossary ファイル用の一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または設定します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
  - Business Glossary ファイル用のアセット添付ディレクトリの場所を確認または設定します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
  - アナリストサービスをリサイクルする。  
アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービス、データ統合サービス、コンテンツ管理サービスのアップグレードおよびアップグレード後の手順を完了します。
- ☐ プロファイルおよびスコアカードに次のタスクを実行します。
- データドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリにインポートします。定義済みデータドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリに追加する場合は、Informatica\_IDE\_DataDomain.xml ファイルをインポートします。
  - infacmd ps restoreProfilesAndScorecards コマンドを実行して、以前のバージョンのプロファイルとスコアカードを現在のバージョンに復元します。
  - スコアカードを実行して、作成したスコアカードの[累積メトリック傾向]ペインの統計情報を表示します。
- ☐ ODBC プロバイダタイプを使用するようにすべての Microsoft SQL Server 接続をアップグレードします。
- ☐ SQL データサービス用の Informatica ドライバをアップグレードします。
- ☐ Data Transformation ファイルを以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。
- ☐ 実装が必要な新機能、または有効化が必要な新しいオプションのリストを確認するには、『*Informatica の新機能および変更点*』を参照してください。

## 付録 B

# ディストリビューションパッケージの管理

この付録では、以下の項目について説明します。

- [ディストリビューションパッケージの管理の概要, 133 ページ](#)
- [作業を開始する前に, 134 ページ](#)
- [コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除, 134 ページ](#)
- [サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除, 135 ページ](#)
- [インストールした後に, 136 ページ](#)

## ディストリビューションパッケージの管理の概要

Integration Package Manager（パッケージマネージャ）を使用して、Informatica サービスマシンおよびクライアントマシンからディストリビューションパッケージをインストールおよび削除できます。

ディストリビューションパッケージは、次の処理要件を満たすためにドメイン内にインストールする一連のディストリビューションバイナリです。

- Hadoop または Databricks 環境に処理をプッシュする場合。
- Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合。
- Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks 環境に接続する場合。

アップグレードプロセスまたはインストールプロセス中にディストリビューションパッケージをインストールしなかった場合、またはディストリビューションパッケージを追加する場合は、ディストリビューションパッケージをインストールできます。別のパッケージを使用する場合、または使用しないパッケージをインストールした場合は、ディストリビューションパッケージを削除できます。

ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除するときは、すべてのサービスマシンとクライアントマシンに対して操作を実行していることを確認してください。

## 作業を開始する前に

Integration Package Manager を実行する前に、環境変数の設定やファイルのダウンロードなどのタスクを実行します。

1. Informatica Services をシャットダウンします。
2. 次の環境変数のいずれかを設定します。

変数	説明
INFA_JDK_HOME	サポートされる Java Development Kit (JDK) が含まれるフォルダの場所。次の場合は、INFA_JDK_HOME 環境変数を設定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>- Informatica ドメインが Windows または Linux プラットフォーム上にある</li><li>- Informatica クライアントである</li></ul>
INFA_JRE_HOME	サポートされている Java Runtime Environment (JRE) が含まれているフォルダの場所。Informatica ドメインが AIX プラットフォーム上にある場合は、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定します。

3. パッケージマネージャを実行するユーザーに、Informatica インストールディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限があることを確認してください。
4. Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトから次のファイルをダウンロードします。
  - [Integration Package Manager](#)
  - [Distribution packages](#)
5. Integration Package Manager の ZIP ファイルをローカルドライブに抽出します。
6. 必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Integration Package Manager ディレクトリ>/source  
**注:** ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、パッケージマネージャは失敗します。

## コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除

Integration Package Manager をコンソールモードで実行して、ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除できます。

1. 統合パッケージマネージャディレクトリから、次のいずれかのコマンドを実行します。
  - ./Server.sh console (Linux または UNIX の場合)
  - Server.bat console (Windows の場合)
  - Client.bat console (クライアントの場合)**注:** Windows でコマンドを実行するには、管理者のコマンドプロンプトを使用します。
2. サービスまたはクライアントのインストールディレクトリを入力し、**Enter** キーを押します。

3. 操作タイプを選択し、**Enter** キーを押します。
  - 既存のディストリビューションパッケージを削除するには、1 を選択します。
  - 1 つ以上のディストリビューションパッケージをインストールするには、2 を選択します。
 インストールまたは削除できるディストリビューションパッケージがコンソールに表示されます。
4. インストールまたは削除するディストリビューションパッケージを、複数の場合はカンマで区切って入力します。**Enter** キーを押します。
5. Integration Package Manager のログファイルで、インストールまたは削除のステータスを確認します。  
 ログファイルは次の場所にあります: <Integration Package Manager ディレクトリ>/  
 IntegrationPackageManager\_<日付とタイムスタンプ>.log

## サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除

Integration Package Manager をサイレントモードで実行して、ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除できます。サイレント入力プロパティファイルには、パッケージマネージャをサービスおよびクライアントのサイレントモードで実行するためのプロパティが含まれています。ファイル内の各プロパティに適切な値を設定します。

1. 次の場所で IntegrationPackageManager.properties ファイルを見つけます: <Integration Package Manager ディレクトリ>/
2. テキストエディタでプロパティファイルを編集します。  
 以下の表に、変更可能なプロパティを示します。

プロパティ名	説明
USER_INSTALL_DIR	サービスまたはクライアントのインストールディレクトリ。
OPERATION_TYPE	実行する操作: <ul style="list-style-type: none"> <li>- 既存のディストリビューションパッケージを削除するには、DELETE に設定します。</li> <li>- 1 つ以上のディストリビューションパッケージをインストールするには、EXTRACT に設定します。</li> </ul>
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	ディストリビューションパッケージとバージョンを表示します。 インストールまたは削除するディストリビューションパッケージを入力します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。

3. プロパティファイルを保存します。
4. 統合パッケージマネージャディレクトリから、次のいずれかのコマンドを実行します。
  - ./Server.sh silent (Linux または UNIX の場合)
  - Server.bat silent (Windows の場合)
  - Client.bat silent (クライアントの場合)

**注:** Windows でコマンドを実行するには、管理者のコマンドプロンプトを使用します。

5. Integration Package Manager のログファイルで、インストールまたは削除のステータスを確認します。  
ログファイルは次の場所にあります。<Integration Package Manager ディレクトリ>/  
IntegrationPackageManager\_<日付とタイムスタンプ>.log

## インストールした後に

パッケージマネージャを使用してインストールしたディストリビューションパッケージを使用するには、サービスマシンおよびクライアントマシンでプロパティまたは環境変数を設定します。

### Developer tool の設定

Developer tool にディストリビューションパッケージをインストールした後、developerCore.ini ファイルを、インストールしたディストリビューションパッケージで更新します。

1. 次の場所で developerCore.ini ファイルを見つけます: <Informatica インストールディレクトリ>\clients\DeveloperClient
2. ファイルを編集して、次のプロパティを更新します。  
-DINFA\_HADOOP\_DIST\_DIR=hadoop\<Hadoop distribution name>\_<version>  
例:  
-DINFA\_HADOOP\_DIST\_DIR=hadoop\CDH\_7.1
3. Developer tool を再起動します。

### 環境変数の設定

一部のアダプタでは、データ統合サービスおよびメタデータアクセスサービスがディストリビューションパッケージにアクセスするには環境変数が必要です。詳細については、

[Configure environment variables to process complex files](#) を参照してください。



# 索引

## A

AIX

Java Cryptography Extension [39](#)

Java Runtime Environment [39](#)

## D

dbs2 接続

データベース接続のテスト [81](#)

DISPLAY

環境変数 [49](#)

## I

IATEMPDIR

環境変数 [34](#), [41](#), [49](#)

Informatica services

サイレントモードでのアップグレード [71](#)

Informatica サービス

グラフィカルモードでのアップグレード [58](#)

コンソールモードでのアップグレード [69](#)

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [95](#)

Informatica プロセス

ユーザーアカウント [79](#)

isql

データベース接続のテスト [81](#)

## J

JRE\_HOME

環境変数 [34](#), [41](#), [49](#)

## L

LANG

ロケール環境変数 [34](#), [41](#), [49](#)

LC\_ALL

ロケール環境変数 [34](#), [41](#), [49](#)

Linux

データベースクライアント 環境変数 [81](#)

## P

PATH

環境変数 [34](#), [41](#)

## S

sqlplus

データベース接続のテスト [81](#)

## U

UNIX

コンソールモードでの Informatica サービスのアップグレード [69](#)

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [95](#)

データベースクライアント 環境変数 [81](#)

データベースクライアント 変数 [81](#)

ライブラリパス [103](#)

## W

windows

グラフィカルモードでの Informatica サービスのアップグレード [58](#)

Windows

ユーザーアカウント [79](#)

## あ

アップグレード

ファイルの事前バックアップ [53](#)

後でファイルをコピー [127](#)

アップグレードエラー

モデルリポジトリサービス [111](#)

アプリケーションサービス

ポート [78](#)

アプリケーションサービスのアップグレード

特権 [108](#)

## い

インストール

ファイルの事前バックアップ [53](#)

インストールの要件

環境変数 [34](#), [41](#), [49](#)

ディスク容量 [39](#)

ポートの要件 [78](#)

最小システム要件 [31](#), [39](#)

## お

オブジェクト依存関係のグラフ

再構築 [111](#)

オペレーティング システム

サポートの終了 [77](#)

## く

グラフィカルモード  
Informatica サービスのアップグレード [58](#)

## こ

コンソールモード  
Informatica サービスのアップグレード [69](#), [95](#)

## さ

サイレントモード  
Informatica サービスのアップグレード [71](#)

## し

システム要件  
最小 [30](#), [47](#)  
最小インストール要件 [31](#), [39](#)

## て

ディスク容量の要件  
インストールの要件 [39](#)  
データベース  
接続のテスト [81](#)  
データベースクライアント  
IBM DB2 クライアントアプリケーションイネーブラ [80](#)  
Microsoft SQL Server ネイティブクライアント [80](#)  
Oracle クライアント [80](#)  
Sybase オープンクライアント [80](#)  
環境変数 [81](#)  
構成 [81](#)

## と

ドメイン  
ポート [78](#)

## の

ノード  
アップグレード時の移行 [102](#)  
ノード設定  
変更プロセスの完了 [102](#)

## は

パッチの要件  
インストール [32](#), [39](#)

## ふ

ファイルのバックアップ  
アップグレード前 [53](#)  
インストール前 [53](#)  
ファイルをコピーする  
アップグレード後 [127](#)

## ほ

ポート  
アプリケーションサービス [78](#)  
ドメイン [78](#)  
要件 [78](#)  
ポートの要件  
インストールの要件 [78](#)

## も

モデルリポジトリサービス  
アップグレードエラー [111](#)

## ゆ

ユーザーアカウント  
Informatica プロセス [79](#)  
Windows [79](#)

## ら

ライブラリパス  
環境変数 [34](#), [41](#)

## り

リポジトリ  
データベースクライアントのインストール [80](#)